

ひたぎこよみ4

001

鍋と、フライパンと、ええと、やかんと——いや、
 やかんより電気ケトルの方が便利だって言ってたな。
 ケ原^{がはら}さんの方が、この手のことは経験豊富だから、
 やっぱり素直に聞いておいた方がいいだろう。

——ダンボールがいくつか残っている、まだ、慣れない部屋で。

「おい、兄ちゃん、はやく行くぞ」

「もお、お兄ちゃん、はやく行くよお」

玄関前で、火憐^{かれん}ちゃんと月火^{つきひ}ちゃんが騒ぐ。

「今行くから待っててくれって」

妹達に急かされるまま外へと出ると、目の前が曇るくらいに息が白い。

もう春になるはずなのに、刺すような寒さ。

郊外の地方都市は、ヒートアイランド現象などとは無縁なのだろう。もつとも、僕の住んでいた家は、地方都市から更に遠い、田舎町だったりするのだけれど。

新鮮な景色が広がる。

新しい生活。

期待と不安。

でも。

右手には火憐ちゃん、左手には月火ちゃん。慣れ親しんだ感触が心強い。

でも。

「おい、そんなにべったべったくつつくなよ」

家の中ならともかく、外なんだからもう少し考えてくれないかなあ。それでなくとも、大きくてジャージの似合う女の子と、小さくて和服を着こなした女の子で——なんというかこう、目立つんだからさ。そんな僕の想いなんておかまいなしに、火憐ちゃんはじゃれついてくる。大きな妹が無邪気にじゃれ

ついてくれるのは素直に嬉しいけど（いつもは関節技なりなんなりだから）、腕に当たる柔らかさと暖かさは、本当に気持ちいいのだけれど。

とびつきの無邪気さ。

半端ない攻撃力。

それゆえに。

こいつの場合は、やっぱり怖かったりもするんだよ。何かと引き換えに生殺与奪の権を握られているというか、そういう精神的な面が。

そういうえば、神原にもそんなところがあったかもしれない。こんなところはさすが、師匠と弟子といったところだろう。神原の場合、その恐怖の対象はフルボッコにされたというか——まあ、なんというか、例の左腕に殺されかけたことよりも、その後のデートの方だった。戦場ヶ原の指示で行った、あのデートだ。やっぱり、あの頃の戦場ヶ原は怖かったから。

無論、戦場ヶ原は今でも怒らせると、いや、そう

じゃない部分も、色々とすぐ怖いのだけれど。

勿論、その分だけすぐ、本当はとても優しいのだけれど。

「今日は戦場ヶ原さんどうしたんだ？ いつも一緒にのくせに」

火憐ちゃんは屈託のないとてもいい笑顔で、珍しく僕を見上げながら言う。普通に立っていれば僕よりも背が高いから、こんなことは滅多にないのだが、僕の右腕の痛さと恐怖と気持ちよさと引き換えの、珍しい位置関係。

そんな火憐ちゃんは神原先生との関係もあり、戦場ヶ原大好きつ子なのだ。とはいえ、こいつの場合は、誰でもいいんじゃないかと思ってしまうこともあるのだが、でもまあ、火憐ちゃんにとって、やっぱり神原先生は特別だしな。戦場ヶ原のことも特別に想ってくれているのだろう。

「ああ、今日は用事があるんだってさ。本当は、一緒に行く予定だったんだけどな」

——早朝。

暖かで柔らかく、いい匂いのする……湿度の高い
微睡まじろみの中だった。

ひたぎの携帯電話が鳴り、彼女が布団からそおつ
と出ていったところまでは……なんとなく覚えてい
る。僕の皮膚から、柔らかで暖かで触り心地のいい
——そんな、安心できる感覚が、失なわれていった
ような気がしたから。気持ちよさと気だるさの中間
で、とても寂しく思った覚えがあるから。

はつきりとはではなく、あくまでも、なんとなくだ
ったけれど。

なんとなく曖昧あいまいなのは——僕はその後、お昼近く
に目が覚めるまで、本当に記憶がなくなるんじゃない
いかつてくらい、起きることができなかったからだ。
泥のように眠っていたからだ。もう、ドロドロにな
るくらいに。

なぜ
何故なら——

昨日の夜から空の色が変わるくらいまで……この

季節だから大分日が長くなってきたとはいえ、空の
色が変わるつていつてもほとんど朝のことなだけ
れど、その間、ずっと——あれだったから。

吸血鬼体質になってから睡眠についてはそれほど
気にしなくてもよくなった僕が、睡魔にこれだけ一
方的に負けてしまうのは、こんなときくらいだった。
普段の睡眠をさほど必要としないかわりに、その、
なんというか——いわゆる……事後に酷い眠気を感じ
ることがあるのだ。つまり、これは吸血鬼特有の
性質なのだろうと思い、前にそれとなく忍しのびに聞いて
みたことがあったのだが、心底呆あきれた顔で、吐き捨
てるように「やりすぎじゃろ」なんて言われてしま
ったのを、今更ながら思い出してしまう。

そんな夢のような今朝、というか、昼近くの寝起
きは、やはり夢のようで——

『こよみへ。』

ごめんなさい、急用ができました。

気持ちよさそうに寝ていたから、黙ってシャワー

を借ります。

後で、電話します』

なんて。

そんな珍しい書き置きが枕元まくらもとになれば、やはりそれは、現実のこととは思えなかったかもしれないかった。

正確には、その直後に自分の下半身やシーツの状態で、それが夢でなかったことを再確認させられることになるのだけ……。

そんな、夢のようなのに生々なまなましい話を妹達にできるはずもなく――

だから、僕はちよつと曖昧に答えるしかなかったのである。実際のところ、書き置きの内容からも、そう答えるしかなかったのだが。

勿論、戦場ヶ原に電話をしようかとも思ってたけれど、急用らしいし、電話をくれると書いてあったし、あまりしつこくしても――なんて思い、こちらからは連絡をしていなかった。

連絡をすれば、きっと戦場ヶ原は喜んでくれると思うけれど。

「へえ、あの戦場ヶ原さんが用事だなんて、珍しいこともあるもんだな」

……微妙に失礼な物言いである。

火憐ちゃんめ。人の彼女を暇人扱いするな！ 戦場ヶ原だつて、僕やお前らばかりをかまってるわけにはいかないんだよ。

「そうだね。どうしちゃったんだろうね」

同じく、月火ちゃんが首をかしげる。こいつ、どちらかという羽川派で、一時期、戦場ヶ原のことを怖がついていたというか、かなりビビったりしてたことがあったのだが、最近は「なんか戦場ヶ原さんって、本当、クールビューティーでカッコよくて、ちよつと近寄りがたい感じがしたけど、なんか話してみると優しいよね。ていうかちよつと変？ ていうか面白い人？」なんて笑いながら言ってたから、本当に戦場ヶ原をよく理解してくれているみたいだ

った。

つか、どうも戦場ヶ原は、妹達の前でやたらとクールビューティーとツンデレ———というかツンツンを気取っているからなあ。

別に、普通にしてればいいのに。見た目はクールビューティーなんだからさ。

まあ、それが作りだつてのはバレバレなんだけど。火憐ちゃんとは仕方ない（火憐ちゃんは、どんどん設定が酷くなってるなあ……）としても、鋭い月火ちゃんに気付かれないはずがなかった。

ていうか。

普通気付くわ。

とにかく、デレとかドロを見せたくないっぽいんだよな、戦場ヶ原は。

むしろそういう行為自体が、ツンデレ、というかツンドロっぽく見せてしまっているような気がするんだけど、それは僕の気のせいなのだろうか。

それはともかく。

そう、戦場ヶ原といえば神原後輩。

神原と月火ちゃんは、僕の知らない間にいつの間にか仲がよくなっていて———当然、変な意味ではなく、普通に、だけれど。

今のところは。

多分。

ええと——

火憐ちゃんが神原に紹介して、何度か会っているうちにそうなってしまったらしい。しかしまあ、神原に関しては色々な意味で予想済みだったりして色々警戒もしていたのだけれど、思わぬ伏兵というかなんというか……うーん、戦場ヶ原がなあ。どうも女の子に関しては危つかしいところがあるみたいだから———神原と同類というか神原の師匠というか。

神原もそうだけど、あいつらどこまで本気なんだか——

羽川がやたら心配してたし。別に、いいけどさ。

いいや、よくない。

しかし、なんで羽川がそんなことを知ってるんだろ。まさか、あいつらに変なことされてないよな。

少なくとも戦場ヶ原は、一時期、僕に羽川の胸のことをやたら自慢してたんだよな。なんでお前が自慢するんだよ的な感じで、思わせぶりに。

羽川、あの事件のとき、戦場ヶ原が色々してくれただけであらう。ついでに色々しちゃったのかなあ。あの件に関しては、羽川も戦場ヶ原もやたら仲良く共同戦線を張って、あまり教えてくれないからなあ。

うーん。

うーん……。

うーん……………。

それだけならともかく……少しずつ、周辺に悪い影響がはじめてるし。

神原と戦場ヶ原の影響。

戦場ヶ原と神原の悪影響。

あいつら——戦場ヶ原と神原って、ヴァルハラコ

ンビじゃなくて、悪腹コンビじゃねえのか……。つて、ちよつと語呂がよかったから思わずルビまで振っちゃった（そんな言葉は存在しない）けれど。

で、その、具体的な悪影響というのは、なんというか——不必要な、必要以上のスキンシップというか。

千石（せんごく）の場合はなんだか嬉しそうにキヤッキヤウフ（千石はウフフとしか言わないけれど）とされて、いるから別にいいのかもしれないが、八九寺（はちくじ）へのスキンシップはもう完全にセクハラだったからなあ！
後から八九寺に「さ、さすがアレラギさん兄妹です。まさか妹さんから、同性からセクハラを受けるとは思ってもいませんでしたよ！」なんて言われたし。
最近はそのことを知った忍が、八九寺Pの横暴にファイヤースターズを利用して抵抗してるらしく、もう、わけのわからないことになってしまっている。忍も直接抵抗すればいいのになあ。そんな忍は八九寺Pから酷使されているみたいで、ここ数日見かけてい

ない。まあ、忍を見かけないのはそれだけの理由じゃないんだけど。どうも新しい部屋と、相性が悪い、というか、なんというか……。しかしあいつら、一体どんな仕事をやってんだか。ていうか見た目でいったら労働基準法に抵触するような気がするんだけど、忍は五百歳越えてるからなあ、つうか六百歳近いし——「お前様は儂に言ってくれたじやろう、お前が明日死ぬのなら僕の命は明日までいいと！ ツーテイルの小娘の陰謀から助けてくれ！ それかそうじゃのう。ミスタードーナツに連れて行ってくれれば助かるかもしれぬ」なんて必死に言っていたけれど、八九寺Pもそこまで酷いことはしないだろう。ということであつておくことにした。事実ミスタードーナツに連れていくとコロつと機嫌が直るしな。

それはともかく、だ。

長々と回想をしてしまったけど、何の話だっけか。

ああ、戦場ヶ原が用事があるから来れないって話だつたっけ。

「——いや、まあ色々あつてなあ」

まさか妹達に、彼女と一緒にの布団で微睡んでいたなんて、そんな状況を説明できるわけもなく。

曖昧な僕の返答と、妙に長い回想をしまつていた微妙な間に、月火ちゃんは何を勘違いしたのかかした首を戻し、神妙な表情で、

「……ああ、お兄ちゃん。浮気だね、それ」

なんて、珍妙なことを言い出す。

火憐ちゃんも、

「……ああ、兄ちゃん。浮気だな、それ」

だなんて、……奇妙なことを……。

「は、は、はつはつは、そ、そんなわけないだろ」

——だって僕達はもう……お前ら子供にはわからない関係なんだぜ。だってあいつ、二人きりのときの甘え方っていったら……とくにここ数日は——昨晚だつて、朝までだぜ。ふっふっふ。

「お兄ちゃんのその自信つて、どこからくるんだろうね。だつてさ、戦場ヶ原さんってすごい美人じ

やない？ 学校ではクールビューティーとか深窓の令嬢なんて言われてたんでしょ？ 大体、そもそもなんでお兄ちゃんなんだろう」

むう。

「そうだぞ兄ちゃん。ていうか、なんで兄ちゃんのまわりには美人しか居ないんだ？ 翼さんといい、神原先生といい——」

「だ・か・ら」

にまあ。と、笑みを浮かべながら月火ちゃんが言った。

「まあ、浮気だな」

それを受けて、得意顔の火憐ちゃんが言った。

「んがぁ、やめてくれ！」

そりゃあ、あいつと僕が釣り合わないなんてことは重々承知している。僕が一番よくわかってるんだよ！ お前ら僕の唯一の幸せまで弄^{もてあそ}ぶのはやめてくれ！ 実際、あいつモテてモテて心配で心配で仕方ないんだよ……。

あんなに愛しあつたにもかかわらず。

昨夜も朝まで果てしなく交じわつた僕達なのに。

僕は果てもなく心配になつてしまう。

僕、こんなに疑り深い性格だつたかなあ……。これまでそんな描写、一度もなかったよね。

「本当、お兄ちゃん面白いなあ」

「うそだよそ。ああ見えても戦場ヶ原さん、兄ちゃんにベタ惚れだもんなあ」

つか、ああ見えてもって。

「そ、そうか？」

「ま、そうだね。妬けちゃうくらい、すごくツンツンしてるように見えるけど、そう見せてるけど、怖いくらいにお兄ちゃん一筋つて感じ」

ジト目なのに鋭い月火ちゃん。

むしろ月火ちゃんが怖いって。

しかし、戦場ヶ原が怖いくらい——というのは同感だった。無論、一時期ほどの危うさは無くなっているのだけれど——

情の深い女。

やはり、そこは変わっていなかった。でも、僕だつて戦場ヶ原一筋だけだな。怖いくらいと言われると、ちよつとわからないが。

「ていうか兄ちゃん、家から学校通えばいいのにさ。ちよつと寂しいぜ」

火憐ちゃんは突然、話題を変える。

「いやあ。それはないでしょう」

につしつし。とても言いだしそうな表情で、月火ちゃんが言った。

「ええ、なんでだろう」

火憐ちゃんが首をかしげる。

「ねえ、お兄ちゃん」

んつふつふ。とても言いだしそうな表情で、月火ちゃんが言った。

「あ！ ああつ、そうだな！」

火憐ちゃんも気付いたみたいだった。につしつし。んつふつふ。と、左右からステレオ

で。いや、サラウンドで。僕のまわりをぐるぐる回りながら、3Dではやしたてる。

ああ、うつとうしい。

でも、それでも、やつぱり嬉しい。

羽川と戦場ヶ原のおかげで、なんとか進学することができた僕（勿論、戦場ヶ原と同じ大学だ。かなり危ないところではあったけど）は、実家を出て学校の近くに部屋を借りることになったのだった。一人暮らしは憧れていたし、学校が家からちよつと距離があるのと、親がいい機会だからと家を出るのに賛成してくれて——色々と援助をしてくれたのである。久しぶりに親に無理を言ったような、甘えてしまったような、本当に、そんな気がする。

新しい部屋はいささか古いけれど趣のある——というか味のある、いかにも昭和な感じで、風呂も付いているし、なんだかやたらと収納が広い造りだった。収納だけでなく、部屋数も一人で住むにはちよつと多いくらい、僕なんかが住むには随分と贅沢

なもので、その割に家賃は格安という、滅多にない掘り出しものだっらしい。こういう所は田舎ならではなのだろう。

引っ越してきて、もう五日。

部屋の隅に置いたままのダンボールも片付けなきやなあと思いつつ。

生活に必要な最低限の道具はすぐに揃えたのだけど、細々としたものは忘れてしまうものだし、なければならぬ、なんとかなってしまうので、いい加減そろそろ、きちんと揃えてしまいなさいな。なんて促されるまでは、なかなか買いに行くタイミングが作れなかったのだ。

というか、なんていうか、それだけじゃなく、ちよつとした個人的な理由もあつて。

で、今日は細々としたものの買い出しというか、デートに出掛けるはずだったのに。

そんなことを言った当の本人、戦場ヶ原が急用で行けなくなってしまったから、その代わりに、と言

つては悪いな。まあ、荷物持ちとして、妹達が僕のまわりで騒がしくしている——と、いうわけなのだった。

ちなみに、戦場ヶ原はどさくさで、ほとんどずっと僕の部屋と一緒に居る。半分同棲みたいな状態になつてしまつていた。引っ越しやらなにやらを色々手伝つてくれてから——

そのついでみたいに。

自然に。

当然のように。

このあたりは昔から変わらない戦場ヶ原なのだった。もつとも、まだ引っ越したばかりだから同棲なんていつても、ちよつとしたお泊まりみたいな感覚だし、そもそも、毎日のように遊びにくる妹達の手前、本当にずつと一緒に居られるわけではなかったのである。大体、僕が民倉荘に泊まった日数の方がよっぽど多いくらい（本当は民倉荘には泊まらない約束をしていたのだけれど、なんだかんだと、結果

的には線引きをした上で泊まることが何度もあつて

——線引きも微妙になりがちだったけど……」だし。

でも「今日、泊まってもいいかしら？」なんて、ちよつと恥ずかしがりながら、僕に確認する戦場ヶ原は民倉荘では見られなかったから、やはり今までとは違う感覚ではあり——ま、確認するもなにも、大きなバッグにお泊まり道具を持ってきたりする

のが戦場ヶ原らしいというか、なんというか。

そんな戦場ヶ原との甘い生活は、火憐ちゃんと月火ちゃんには、瞬^{またた}く間にバレてしまつていた。

折角^{せつかく}、戦場ヶ原が一生懸命、お泊まりなんてしていませんよアピールをしていたのに、清い交際をしていますよアピールをしていたのに。

僕は別にいづれバレる話なんだし、そんなことしないでもいいよと言つていたのだが、戦場ヶ原は半分配地になつてやつてたつていうか……。

わかりやすいところでは、夕方、わざわざ妹達と一緒に帰り、一旦民倉荘に戻つてから、また僕の部

屋に來たりとか、ツンデレを氣取つて僕に対してツンツンしたりとか……その他にも色々、細かい工作を、涙ぐましい努力をしていたのだけれど——

結果、あつけなく、失敗をした。

例の詰め of 甘さ。

ベタさ加減。

さすが、バナナの皮で足を滑^{すべ}らす女。

それは、わかりやすい失敗だった。

洗面所の二本の歯^ハブラシを、妹達に見つけられたのだ。

無論、妹達には散々、色々と茶化されたのだが——いづれにせよ、こいつらには隠しようもないしな。

それにしても、歯^ハブラシを買つて、洗面台のコップに入れたときの戦場ヶ原は、やたらとニヤニヤして、一人くねくねしながら照れてたりしていた（こんな戦場ヶ原は初めて見た）のが印象的で——勿論、僕も嬉しかったりはしたのだけれど、その戦場ヶ原

の表情とふるまいを見ると、こっちの方が嬉し恥ずかしくなってしまうというか、こそばゆくなってしまうというか。

しかし歯ブラシの件が妹達にバレたときの戦場ヶ原の慌て方、ヘコみ方は、本当に可哀想なくらいだった。ちよつと幸せな気分になりたかっただけなのに、こんな失態——昔の私からしたら信じられないミスだわ。いえ、昔の私なら敢えてやったかもしれないけれど。ああ、火憐さん月火さんへの私のイメージが……。

そんなことを言いながら。
頭をかかえながら。

戦場ヶ原はくずおれるのだった。

「つーかお前、イメージとか気にしてたんだな」

まあ、月火ちゃんなんかは、そんなにイメージが変わってないと思うけれど。

戦場ヶ原は、半分涙目になって言う。

「当たり前でしょう。あなたの彼女は、しっかりし

た、クールビューティーなお姉さんなんだから」

「……自分で言うなや」

なんて感じで。

まだ、お泊まりの延長の半同棲みたいなもんだからいいと思うけれど、本当に同棲するようになったら、ちゃんと戦場ヶ原のお父さんにも挨拶をしに行かないといけないんだろうなあ。

ていうか、うちの親にだってなんて言ったらいいんだろう。

ま、同棲もなにも、引越して五日目だ。そんなことはまだ考えないで、いいよね？

……はあ。

なぜかため息。

そういえば付き合い始めた頃、戦場ヶ原に言われたつけ。ため息すると幸せが逃げていくわよ——みたいなことを。

「なにお兄ちゃん、ため息なんてついているの」
さすが鋭い月火ちゃん。すぐに気付かれる。

「ん、いやな」

「大丈夫だよ、兄ちゃん。戦場ヶ原さんのことはパパとママには黙っておくからさ」

「うんうん。そんな簡単にバラしたりしないって」

「なんか嫌な言い方だな」

「搾れるだけ絞^{しぼ}ってからだよ」

「最悪だ！」

「更にあたしは物理的に絞^{しぼ}ってやるな！」

「勘弁して！」

「つかこいつ、技を思い付いたらまず僕で試すの止めてくれないかな。僕がこんな体質じゃなかったら、本当に大怪我してると思うのだが。」

「あ、そういえば」

「いきなり、火憐ちゃんが何かを思い付いたように言った。」

「そういえば？」

「月火ちゃんが絶妙なタイミングで、合わせるように訊ねる。この阿吽の呼吸は流石ファイヤーシスタ

ーズ。真似できない領域だろう。」

「野球のスクイズって搾るって意味なんだぜ」

「へえ」

「ほう。存じませんでした。言われてみればそうか。でも、思わず関心してしまう。」

「そうそう。火憐ちゃんも月火ちゃんほどじゃないにせよ、最初は賢いというか、僕なんかと違って出来る子ってキャラ設定だったもんな。うんうん、その調子だ。今の路線は、あんまりにもアレだからさ

「へええ。なるほど、言われてみればだねえ」

「ほう、月火ちゃんも知らなかったみたいだ。」

「つふつふん」

「得意顔の火憐ちゃん。このあたりは師匠筋の神原後輩や戦場ヶ原と似てきてしまっている。」

「ちよつと心配。」

「なんで野球にスクイズが必要なんだろうなあって気になって調べたんだ。ていうか酢スクイズ？ それと

も素のクイズ？ つて——ええと、まあ、それだけなんだけどな」

.....

「オチとかちゃんと考えとけや！」

大体なんだよ酢クイズつて。わかりにくすぎるわ。ていうか意味わかんないだろ。

.....やっぱり火憐ちゃんの賢い路線？ への変更は無理のようだった。いいよいいよ。

火憐ちゃんは火憐ちゃんで、いいところは一杯あるんだから！

つうか、キャラは立つてるしな。うん。

そんな火憐ちゃん月火ちゃんと、いつもの下らない馬鹿話をしていると——気付けば僕達は、近所のホームセンターに辿り着いていたのだった。

雑貨屋さんや百円ショップでもいいのだけれど、ここは近いし安いし、わりとちゃんとしたものが色

々と揃うから。あと、テンション上がるんだよね、ホームセンターつて。なんでだろう。これは戦場ヶ原も言つてたから、僕だけじゃないと思うのだけども。ちなみに、忍は基本的にあまり興味がないようだった。あいつはドーナツがないとな。

広い駐車場を歩き、オープンテラスのような入口から内部に入る。なんだかちよつとお洒落な作りだったりするこのホームセンターは、色々な催し物をやっていたり、所謂ホームセンター的ではない、女の子が喜びそうなテナントも入っていたりして、娯楽施設の少ない田舎にはちよつとしたデートスポットになるようなところだった。

実際、何度か高校生の頃にも戦場ヶ原と来たことがあつて——まあ、戦場ヶ原がまだまだお茶目だった頃は、工具コーナーが恐怖でしかなかったのだけれど——

「あら。この工具は——文房具よりも、随分と甚振り甲斐がありそうね」

例の、無表情で。

例の、クールな声で。

「いやいや！ さ、さすが、戦場ヶ原さん、お目が高い！ でも、そんな工具より、ほら、あつちの女の子らしいのを見ましようよ。あー、ほらほら、キッチンコーナーとかさ」

「はっ、興味ないわね。いえ……そういえば、ピラーもそろそろ、阿良々木くんの皮を剥きすぎて切れ味が悪くなつてきちゃったから、後でそっちも見てみようかしら」

……キッチンコーナーも危険だった。

包丁とかナイフじゃなくて、あえてピーラーを選ぶところが戦場ヶ原らしいよな。なんて、妙な感心をしたのを思い出してしまう。

「それより、これ、ちよつとでいいから試させてくれないかしら？」

目をキラキラとさせて。

「それはマジやばいって。死んじゃうって！」

「ふん、不死身のくせに頼りないわね——ええとね、一応、言っておくけれど、冗談よ。冗談だからね」

——的な。

きつと余所目から見たら、バカッフルだと思われるくらいにベタベタとしながら。この頃——その、今、みたいな関係になるちよつと前、スキんシップへの抵抗が薄れてきたのか、僕を信頼してくれるようになったのか、やたらと戦場ヶ原は、僕にくっついてくるようになったんだよな。会話の内容は相変わらずだったのだけれど——

今思えば、あれはあれで？ 甘えて？ くれていたのだから。

そんなことを思い出しながら、工具コーナーをなんとなく無意識に早足に通り過ぎ、キッチン道具コーナーに入る。その途端、火憐ちゃんが「兄ちゃんこの鍋いいな。買おうぜ！ カレーだ！ カレーだぜ！」なんて言っではしやぐ。

子供か。

居るよなあ。

こういう所に来ると、急にテンション上がつちゃう子供。

ふ、大人の僕としては、冷静に窘めておかなければなるまい。

「こんな業務用の給食室にあるような大きな鍋、どこに置けばいいんだよ！」

「いや、でも、大量にカレー作れるぞ？」

「大勢でキャンプするわけじゃないんだよ！」

「いや！ 大量に作るとカレーは旨いんだ！」

「なあ火憐ちゃん。これな……」

火憐ちゃんは目を輝かせながら僕の台詞をさえぎり、切れ気味で言う。

「なんだ兄ちゃん食えないのか！ ならあたし一人で食うからいいよ！」

「いやな火憐ちゃん……」

「うーん、これがあれば、あたしもカレーの妖精に会えるかもしれないな」

興奮状態の火憐ちゃんと会話を成立させることは、最早不可能だった。なんだカレーの妖精つて。どんな要請があれば出てくるんだよ。

月火ちゃんはそれを見て笑いながら「あはは。ちよつとあっちの方見てくる」なんて言い、すぐに僕達から離れてしまう。

逃げられた。

……そりやまあ、恥ずかしいよな。

「火憐ちゃんは行かないのか？」

月火ちゃんの声のせいか、我に返り、少し落ち着いてきた火憐ちゃんに声をかける。

「いやあ、あたしは、この大きな鍋が」

「鍋はもういいから！」

なんでそんなに食い付いてるんだよ。

「……見てるのはいいけど、壊すなよ」

「ああ、大丈夫だよ兄ちゃん。愛しの鍋だから、壊したりしない」

なんだか妙に芝居がかった口調で言われてしまう。

もう埒が明かないので、愛しの鍋の前から動かない火憐ちゃんを置いて、家庭用のキッチン道具を見ることがした。テフロン加工のフライパンと、そこそこの鍋を買い物カゴに入れる。幸いガスを使える部屋だった（むしろ、電気コンロやIHしか使えない部屋があること自体を知らなかった）ので、ちよつといいものを買うつもりだった。

最近、戦場ヶ原の料理の腕がめきめきと上がっていて、どうしても奮発していいものが欲しくなってしまうのだ。あいつ、進学は推薦だったから、冬の間ずっと暇で料理ばかりしていたらしくて、会うたびに、振る舞ってくれる料理が美味しくなっているのがわかるくらいだったから。「べ、別に阿良々木くんに、美味しいものを食べてもらいたいってわけじゃないんだからねっ」とか、そんな本気なんだか冗談なんだかよくわからない棒読み台詞を、照れながら言っていたことをよく覚えている。

だからこそ、あまり炊事関係の道具を積極的に買

う気になれなかったというか。他人からはよくわからないかもしれないが、その、自分の中で葛藤みたいなものがあつて、戦場ヶ原に催促しているみたいな形になってしまうと、なんというか、照れくさいというか。そんな複雑な嬉し恥ずかしい悩みもあつて、なかなか買いに来れなかったのだ。自分からは言い出しにくかったのだ。

そんなことをニヤニヤと思い出していると、急に買い物カゴが重くなる。

数本の、いや、数種類のボールと一緒に月火ちゃんが戻ってきた。

ああ、ボールってサイズとか色々あるんだなあ。ほほう、と。

関心してしまう。

ああ、完全に月火ちゃんといえばボールってイメージが付いちゃったよなあ。

別に戦場ヶ原のホッチキスみたいに、何にかかってるわけじゃないのに。

いやいや。

というか。

「んなもん無造作に買い物カゴに入れるなや！」

業務用愛しの鍋に飽きたのか、いつの間にか近くに居た火憐ちゃんが爆笑する。

「あははは！ 月火ちゃんってば、なに持ってきてるんだよ」

「いや、やっぱりボールは必需品だから」

真面目な顔で言う。

「意味がわかんねえよ！ 必要ないから！ 返してきなさい！」

「なんでよ。暴漢が来たら武器が必要でしょ！」

「僕の部屋はどんだけ物騒なんだよ！ ボールのどこが必需品なんだよ」

こんな田舎にそんな暴漢が居るか！

どこの世紀末だよ。もう、月火ちゃんが一番物騒だよ！ えーと、月火ちゃんって賢い設定じゃなかったか？ どこでこんな残念な子になっちゃったん

だろう……。

「じゃあいいよ。私が買うから」

「ああ、お前が買うならいいよ」

ぶんぶんとしながら、自分で買い物カゴを持ってくる月火ちゃん。

月火ちゃんは、まるでお菓子でも扱うような自然な所作で、ボールを僕の買い物カゴから自分で持ってきた買い物カゴへ移動させている。

「え、本気で買うの？」

そんな月火ちゃんを見て、僕も火憐ちゃんも、ちよつと、素で引いてしまうのだった。

002

買い物からの帰り道。

国道から奥に入った住宅街。

電柱、電線、マンホール。

道路標識、一方通行。

制限速度20キロ。

止まれの道路表示がある、交差点。

ブロック塀で囲まれた住宅が並ぶ、長細い裏道。

なんでもない帰り道。

大きなリュックサック。

見慣れたツインテイル。

本能のままに（妹達と一緒にということも忘れ）、

いつものように正面に見えるその小さな愛らしい身

体に飛び付こうとすると、僕は視界の横にあったは

ずのブロック塀に激突していた。驚愕と、激痛が始

まる前の鈍い痛みの中、しばらくその意味が、なぜ

僕ではなく、火憐ちゃんがリュックサックに凄い勢

いで向かっているのかをなかなか理解できなかった

が――

思いもよらぬところで、僕の嫌いだった物理が役に立つ。

羽川と戦場ヶ原のおかげである。

ビリヤードの玉と玉が衝突するように、火憐ちゃんが僕の後から僕を斜めに突き飛ばし、その女の子に飛び付いていたのだ。

単純な物理法則である。

僕が吸血鬼そのものだったら、こんな下らない物理法則なんて無視してやったのに。ブロック塀に貼り付きながら、その冷たさと表面のざらざら感を、そこから発生した激痛に耐えながら思う。

「真宵まよいちゃんだっ」

火憐ちゃんが、八九寺を捕まえていた。

捕獲。

確保。

絡めとるように。

逃げられないように。

「きゃーっ!？」

くそっ。僕の生き甲斐を取りやがって！ 邪魔しやがって！ 忍だけじゃなく火憐ちゃんもかよ！

まさか妹からこんな仕打ちを受けるだなんて……。

——ていうか、そんなところ触ってんなや！

どんなセクハラだよ！

犯罪だろ、それ！

——ていうか、八九寺ってこんなところにも居るんだな。

今回の引越して、僕が、唯一気になっていたことだった。本当、僕の方から会いに行こうと思ってたのに。

——ていうか、僕の八九寺が妹達に挟まれてるんですけど。

「真宵ちゃん、忍ちゃんはどうしたんだよお」

おい、火憐ちゃん。手加減してやらないと、お前が本気でじゃれついたら、八九寺なんて簡単に死んじゃうんだからな。

ってまあ、もう死んじやつているのだけれど。

「あまり忍ちゃん、いじめちゃ駄目だよ」

月火ちゃんは月火ちゃんて、八九寺の柔らかなほ

つぺをぶにぶにしながら遊んでいる。

——ていうか、壁に激突したまま痛みを耐えている僕のことは無視ですか。ファイヤーシスターズの方々は。

「きゃーっ!? わ、わ、わかりました。だ、大丈夫です！ いじめてませんよ！ ああ、駄目です！ そんなところ触らないでくださいっ！ きゃーっ!? きゃーっ!?」

なんだ、このキャッキャウフフ空間。

例の体質により、ブロック塀に激突した痛みが消えてきた頃だった。いつまでブロック塀にくっついてるんだよ！ 的な突っ込みが来ないので、一人寂しくブロック塀から離れると、

「ていうか、あーららららさん」

八九寺は助けを求めるように、僕の顔を見てから、絶妙の間でいつものように言うのだった。

つうか、助けを求めながらもネタを忘れない八九寺さん素敵！

「なんで僕の名前のところだけ『やって！ とーらい』のナレーションみたいに、人を小馬鹿にしたような口調になるんだよ。わかりにくすぎるだろ。なんだか、僕が失敗した酷い料理みたいじゃないか」

しかも微妙に声色まで似てるのが腹が立つ。戦場ヶ原の僕の声真似なんか、話にならないくらい上手いじゃねえか。ま、戦場ヶ原は声真似上手くないけれどな。中の人は凄いのに。

「失礼。噛みました」

「違う、わざとだ……」

「噛みまみた」

「わざとじゃない!？」

「神谷見た？」

「なんでここで僕の中の人のことが？」

「いえ。キン肉マンの方です」

「せてシティーハンターとか言ってくれよ」

北斗の拳とかな。

「本来ならばコナンネタにすべきでしょうが、ちょ

つと触れづらいですからねえ」

「触れづらいなら、コナンとか、具体的なタイトル出してるんじゃないやねえよ」

「いえ、何を言っているのですか、阿良々木さん。わたしが言っているのは未来少年の方ですよ」

……………。

「そつちのコナンに神谷明は出てねえよ！ わかりにくいよ！ お前何歳だよ！ そんなネタ、誰もわかんねえだろ！」

——ついていける僕も僕だけどな。

「そうですか。でも、今時ウィキペディアでも見れば、そのあたりの知識はなんとかなりますし」

「つうかウィキペディアがネタ元かよ。でも、なんか今時だな。ん、てか、お前そういうの、IT系は苦手なんじゃなかったつけ？」

「いえいえ。今時ウィキペディアくらい使いこなせないと。ああ、ウィキペディアといえばですよ、阿良々木さん」

「ん？」

「ジミー・ウェールズって、全然地味じゃないですよ。なんなんでしょう、あのドヤ顔」

「別に地味だからジミーってわけじゃねえからな。それに、あれはドヤ顔っていうよりも、無駄にいい表情だろ。つか、そのネタはもう時期外れだ。いつからダラダラ書いてるかバレルから、そういう中途半端な時事ネタは止めろ！」

「ただ筆が遅いんだよ。」

「そうですか。では、ええと。失敗した料理みたいというのはいいい表現だと思いますよ。まあ、失敗作という意味では、阿良々木さんもあまり変わらないですし」

「なんでそこに戻るんだよ！ わざわざ中途半端な時事ネタを使ったのに、ここまでの振りは一切無視なの？ ていうか僕、何気に酷いこと言われてる!？」
「思わずギャフンと言いつくことになるくらい。うーん、僕もそれなりに更生しているような気はするんだけど」

「どなあ。」

「おお、真宵ちゃんいいこと言うな」

僕達のいつものやりとりを、あつげにとられながら眺めていた火憐ちゃんが関心する。

「うんうん。本当、真宵ちゃんいいこと言うね。もつと言つてやつてよ。でも、声優さんのネタは全然わかんないけどね——井口裕香^{いぐちゆうか}」

同じく、ぽかーんとした顔をしていた月火ちゃんまで、ここぞとばかりに。ていうか、声優ネタがわかんないからつて、台詞に無理矢理個人名とか入れんなや。

ふふん。と、ジミー・ウェールズばりのいい顔を見せてから、八九寺は言う。

「阿良々木さん。今日は、戦場ヶ原さん居られないのですね」

「なんでお前ら、戦場ヶ原のことばかりなんだよ」

「やはり、主人公のことは気になりますからねえ」

一応、この話は僕が主人公だったような気がするんだけど……そういえば、戦場ヶ原にも奴隷公なんて言われたこともあったし、このネタにあまり深入りするののは止めておこう。

話題を変える。

「てか、お前こそ、忍はどうしたんだ？」

「ああ、忍さんはですね、いま地方……といいましても、ここもかなりの地方ですが、ええと、地方でどさ回りをされています」

……………

「なにでめえ、忍にそんな売れない芸人みたいなことさせてんだよ！」

「いえいえ。忍さんの場合はこれからですからね。そういうネガティブな感じではないのです。アイドルの登竜門ですよ？ 会場は大入りですし。これまでわたしが手掛けてきた中では一番の感触ですね。最悪なケースでは、会場にお客さんが一人も居ないなんてこともあるのですから」

「おお、すごいな忍ちゃん。うーん、サイン貰ったのかな」

火憐ちゃんがオーバーリアクションで関心している。

「写真、今のうち一杯取らせてもらおうよ。友達に自慢できるよ」

月火ちゃんがはしやぎながら、火憐ちゃんに言う。意外とこいつ、ミーハーなんだな。

「てか、お前らの設定が、もう、よくわかんなくなってきたんだけどさ」

つうか八九寺って、ただだけキャリアあるんだよ。

「設定とか言わないでください！」

「お前が言うなや！——でもまあ、あいつも頑張ってるならいいんじゃないか。つうかギャラ上げてやってくれよ。なんで毎回、僕がミスタードーナツで奢ってるんだか」

「阿良々木さん。うちの事務所は、売れるまでは確かにそれなりのギャラですけど、そこまでは悪くは

ないです。それに、それはギャラ云々の話じゃありませんよ」

「そうだぞ、兄ちゃん」

「そうだよ、お兄ちゃん」

この場に居る女の子達（まあ子供と妹だが）に、満場一致で責められてしまう。

「まったく、これだからアララーイさんは。はあ」

「しょうがないか、兄ちゃんだし」

「しょうがないね、お兄ちゃんだし」

.....

「え、なんでそんなに責められてるの？　なんでそんなに諦められてるの？　僕に更生？　のチャンスをつくれないの？　いや、よくわかんないけど。ええと、なんだか雰囲気になされちゃったけど、僕の名前をマケドニア軍のかけ声みたいに言うな！」

「失礼、借りました」

「え、何を？」

「あなたの家の床下を」

「アリエッティ!？」

なんか、新しいパターンだな。

「皆さんは、ジブリ作品ではどの作品が一番好きですか？」

くつ、こいつ——これまでの流れを一切無視して、当然のごとく強引にジブリネタで進行しようとしてやがる。ゴースティングマイウエイにも程があるだろ。いくら道に憑いていたとはいえ。

しかし、こんなところは、さすが敏腕、いやさ剛腕Pといったところか。

「紅の豚だぜ。ポルコが格好いいからな」

「私も、紅の豚かなあ」

こいつら渋いんだよなあ。世代的には普通、ポニョとか、千と千尋あたりだと思うんだけど。

僕なんか、紅の豚の良さなんて、しばらくわからなかったぞ。

しかし火憐ちゃんと月火ちゃんは、飽きもせずよく見てたからなあ、紅の豚。ビデオに録ってあると、

なんとなく暇なときに見ちゃうんだよね。ちょっと古いテープなんかだと、懐かしいCMを飛ばさないと見たりして。そういう刷り込み的なものも大きいのだろう。

もつとも、今時ビデオもないか。

「阿良々木さんは、どの作品ですか？」

「難しいな。僕は、カリオストロの城が好きなんだけど」

ルパン、かつこいいしな。勿論、銭形も。

でも、なんとなく、あの伯爵はくしやくに親近感を抱いてしまうのはなぜだろう。

ちなみに、戦場ヶ原はカリオストロもかなり見たらしいけど、一番好きなのは原作のナウシカなんだそう。ナウシカの性格がいいとかで。

ふふつ、すごいわよ。なんて勧められたから、僕も原作を読んでみたのだけれど、確かに、本当にすごかった。絶句するレベルで。映画版しか見てない人には、あれは結構キツいつて。

まあ、戦場ヶ原らしいといえば、戦場ヶ原らしいのだが……。

ちなみに、羽川も原作のナウシカが好きなんだそうだ……。あと、原作はクロトワもいいよね。なんて言ってたっけなあ。

うーん、女の子ってわからない。あいつらが特殊なんだろうか。

「カリオストロは、ジブリではないですからねえ。いい作品なのですが」

八九寺はちょっと考えてから、微妙にいい表情で言った。

「そうなんだよ」

「へえ、そうなんだ。カリオストロの城かあ。ええと、確か、スパゲッティが旨いつて話だよな」

「いや、違うから」

僕は間髪かんぱついれずに、突っ込んだ。

あの作品をそんな風に要約しちゃったのは、火憐ちゃんが初めてだと思うぞ。もつとわかりやすい、

印象的なシーンはたくさんあるのに！

「確か、監督はジブリ作品の人だけど、ジブリではないんだよね」

はあ。と僕が嘆息していると、なかなかいい発言が。意外と、中途半端にだけ詳しい月火ちゃん。

「しかしですよ、阿良々木さん。床下に小人が居るって、ジブリキャラだからまだ絵になりますが、リアルだったり……そうですね、例えばアメコミ調の絵だったりしたら、相当に引くシチュエーションですよ」

またアリエッティかよ。カリオストロの話はもう終わりなの？

とはいえ、古い作品のことばかりを論じていても仕方がない。新しい作品にも目を向けていかねばならないのだろう。

だからまた、僕もアリエッティの話に戻る。

「そんな軽くホラーだろ。ていうか、女の子が床下に住んでる時点で」

可愛かったら歓迎するかもしれないが。いや、可愛くつてもホラーはホラーだよな。

「別に住んでるのは女の子だけじゃないよ、お兄ちゃん」

「そうだぞ。マッチョも住んでるかもしれないぜ」

「どんだけ嫌な想像してるんだよ、お前ら」

「さすが阿良々木さんです。女の子以外は、即拒否ですね」

「僕のイメージを下げるような言い方は止めろ」

「お兄ちゃんのイメージって、これ以上下がりやがないよね」

なんでジブリネタから、アリエッティから、心暖まるハートフルな話題から、僕のイメージを下げる話になるんだろう。

うーん、しかも、このネタも微妙に時期を外してしまつてるような気がする……。

ま、いいか。

個々の作品ではなく、ジブリ全体のネタと思えば、

時事ネタというわけでもないしな。うん。

「それにしてもですよ、阿良々木さん」

話題を変えるように、八九寺はちよつと真面目な表情になる。

「ん、なんだよ」

「あまり、忍さんいじめちゃ駄目ですよ」

……………。

また僕のイメージを下げるようなことを。

「地方に飛ばしたりとか、半端ないいじめをしてる

張本人に言われたくねえよ！」

「わたしはいじめてません。お仕事です」

うわ、こいつすげえ。言い切ったわ。

「別に、わたしがメインのお話で、大半の美味しいところを持つていかれた件の意趣返しなどではないですよ」

「それを言わなきゃ仕事熱心なPとして尊敬できたかもしれないのに！」

「勿論、冗談ですが」

「まあな。僕だって忍のこと、いじめるわけないだろう」

僕がいじめられることの方が多いしな、実際。

それにあいつは、当然だが、僕の――

「それは、わかっておりますが。でも、だって忍さん、行きたがらないじゃないですか。阿良々木さんの新しい部屋に」

……………。

そうなのだ。

忍と新しい部屋とは相性が悪いというか、忍がやたらと入りたいがらない、というより近寄りたがらないのだ。最初、僕と戦場ヶ原に気を遣^{つか}つてくれるのかとも思ったのだけれど、どうも、そういう雰囲気ではなかったし。

――怯えているというか。

今は小学生の子供に地方に飛ばされてしまうくらいに力しかない（とはいえ八九寺は敏腕、剛腕Pだからなあ）が、最強の怪異、怪異喰いとして頂点を

極めた、あの忍が……。

だから、怯えているというより、相性みたいなものがあるのだろう。例えば例の神社と神原のように、僕は解釈していたのだけれど——むしろ、あの部屋に何かがあるのかと思って（ちよつと古いとはいえ、やたら広い割に家賃が安かったし）、逆に部屋の方を心配したくらいだったのに。

でも、あらためて八九寺から言われてしまうと、やっぱり気になってしまう。

「うーん。何でだろうなあ。おまえら、なんか、忍のことで心当たらないか？ なんでも、どんな些細なことでもいいんだけど」

「ううん、なんだろう。相変わらず、金髪がふわふわで綺麗だなあとか？ いつも触らせてもらうけど、本当に気持ちいいんだよね」

月火ちゃんが、うつとりとした顔で言う。こいつ、ついでにセクハラしてないだろうなあ……。

「ううん、なんだろう。相変わらず、絆創膏貼って

るんだなあとか？ いつも見ようとすると、本気で逃げるんだよね」

火憐ちゃんが、うつとりとした顔で言う。これはもう、セクハラだよな？

「なんか代わり映えしないな。いつものことじゃないか」

ひよつとして、こんないつもの生活が嫌になったんじゃないか、忍は。

戦場ヶ原とも仲が悪いわけじゃないしなあ。ていうか、むしろ仲が良すぎるくらいだし。

無論、こいつらはこいつらで、それなりに複雑な関係ではあるのだけれど——

「ううん、なんだろう。忍ちゃんかあ。ああ、こないだ一緒にDVDを見たとき、忍ちゃん本気で絶叫してたけど、そのくらいかなあ？」

忍がDVDで絶叫？

あいつ最近、僕の影の中で贅沢三昧しなくなったから、なんでブルーレイじゃないんだとか、ケーブ

ルがどうのとか、スピーカーがどうのとか、オーディオマニア的なことをぎゃあぎゃあ言ってたんじゃないの？

「ああ、月火ちゃんと一緒に見たやつだな。あれはびっくりしたなあ。DVDの内容よりびっくりしたっていうか、忍ちゃん、あたしの膝の上に居たから、あたしも飛び上がったぜ」

「あいつと火憐ちゃんが絶叫するって、どんなDVDだよ」

「よくある、昔流行った和風ホラーものだよ、お兄ちゃん。忍ちゃんが一緒に見ようって誘ってくれたんだけど」

和風ホラー？ ああ、呪怨とかリングとか、あのあたりのやつか。でも、あいつ、元とはいえ最強の吸血鬼だよ？なんでそんなDVDで絶叫するんだか。

「あたしは忍ちゃんにびっくりしたただけだって。押し入れから、お化けが出てくるシーンだったかな。」

でも、別にいつもみたいに家のリビングで見たんだぜ。兄ちゃんの新しい部屋で見たわけじゃないし、忍ちゃんがあの部屋を嫌がるって話とは、あまり関係ないよなあ」

「そうだよな。見終わった後、ちよつと演出が卑怯でびっくりしたがの、まあ大して恐くなかったのかかか！なんて言って笑ってたし」

月火ちゃんが首を傾げる。

「忍ちゃん、ずつとあたしにしがみついていたけど、最後まで一緒に見たんだぜ。でも、笑顔が引きつってたようにも見えたけどな。ずつと震えてたし。しばらくあたしに抱き付いたままだったし。めっちゃ可愛かった」

むしろ、少し神原つぼくなっている火憐ちゃんが、ちよつと心配になってくる。

「ひよつとしたら、そのDVD、わたしがお渡したやつかもしれませんね。またJホラーが流行りそうな気配があるので、なんというか、資料にと思いま

して」

「なあ、八九寺。やつぱり——お前、忍のこといじめてるんじゃないか？」

まあ、それは冗談としても、忍も自分から最後まで見てるわけだしなあ。

——うーん。

003

部屋がなかなか暖まらないので、炬燵に三人、肩まで埋まっている。

勿論、八九寺も僕の部屋に誘ったんだけど、忙しとかなんとかで丁重に断わられてしまったから。

「折角の兄妹水入らずを、お邪魔するのなんですよ。わたしも丁度用事ができましたので。ていうか、そろそろ忍さんを見に行かないといけません」

なんて。

八九寺とはまた、いつでも会えるだろうし。だから、あまり強くは誘わなかった。以前、強引に部屋に連れ込んでしまった反省もあるし——

だから、わりとあつさり。

忍によろしくな。と、そのくらいで僕達は別れたのだった。

——それにしても部屋が寒い。

郊外の田舎町。

そのまた外れにある、この部屋。

この地方のこの季節は、一番寒い時期は過ぎたとはいえ、それでもまだ本当に寒いのだ。とはいっても、北海道や豪雪地帯と呼ばれるような地域ほどではないのだけれど。それゆえに暖房設備はそれほど強力ではなく、それなりの普通のもので、しかも、この部屋のエアコンはどうも調子が悪いみたいで——暖房が効かないわけじゃなくて、ちゃんと暖まるんだけど時間がかかったりするときがあつて。

だから、この部屋では炬燵が大活躍なのだ。

「月火ちゃんと炬燵は似合いすぎるなあ」

僕はしみじみと言う。小さな身体に和服姿の月火ちゃんは、炬燵のパーツなんじゃないかというくらいに、まるで炬燵布団に埋め込まれたように馴染んでいた。

「家に、炬燵なかったのにね」

背を丸めながら、ぬくぬくと、気持ちよさそうに月火ちゃんは言った。

そう、実家には炬燵がなかったのだ。正確に言えば、実は僕が子供の頃、火憐ちゃんが生まれる前には古いタイプの炬燵があつただけだ。だから、そんな懐かしさもあつて、ちよつと憧れていた僕が一番最初に買ってしまった家電だった。戦場ヶ原には、他に買うものがあるでしょう？　なんて呆れられたりもしたけれど。でもまあ、これだけ活躍しているのだから結果オーライなのである。

「あたしはどうなんだよ」

ちよつとむくれながら、火憐ちゃんが言った。

「いやあ、火憐ちゃんは炬燵が似合うって感じはしないなあ。痛いっ」

長い足で、僕の太ももを器用につねってくる。

「だつてお前、そんなに寒くないだろ？」

「うん。多少寒いくらいだな。はっはっは。あたしはいつでも熱血だからな」

「その時点で似合う似合わないもないだろ」
ていうか、派手なジャージで何言つてんだか。

「それもそうか」

「納得するのかよ」

「いやあ、実際火憐ちゃんは熱血だよ」

「そりやそうだけど」

「寒い日なんかくつついてると、本当あつたかだもん。名は体を表すって本当だね」

「どうだ、すごいだろ」

「まあ、人間湯たんぽってやつか。随分おっきいけどな」

「湯たんぽつていえば、忍ちゃんはいいぜ」

「ああ、子供は体温高いからなあ」

実際は六百歳近いけどな。

しかし、火憐ちゃんの微妙に神原っぽい発言はどうにかならんものか。

「忍ちゃんといえば、そういえばこの部屋つて、あのDVDに出てきた部屋の雰囲気似てるよね」

「そうなの？」

「ああ、そういえば似てるな。あの押し入れとか、まんまだぜ」

「ふふふ、お兄ちゃん、この部屋……何か、出るかもしれないよ？」

月火ちゃんは、雰囲気を出しながら言う。和服でそんな調子で言われると、実は結構怖いかもしれない。

「そうだぞ、兄ちゃん。ほら、家賃、やたらと安かったんだろ？ あの押し入れが勝手にすうつと開いて——」

火憐ちゃんも、真似して雰囲気を出しながら。でも、なんというか、根本的に明るすぎるからなあ、こいつは。

「小学生じゃないんだから。そんなこと、あるはずないだろう」

僕は、呆れながら言う。

大体、本物の怪異と付き合つて、何度も死ぬ思いまでしてゐるんだぜ、僕は。

実際に、一度は死んでるしな。

「まあ、そりやそうだよね」

つまらなそうに、月火ちゃんが言った。

「そりやそうか」

火憐ちゃんも、同じように。

そんなこんなで、いつもの馬鹿な話。

いつものように、こんな風に、僕がいじられるパターンだけれど。今日のところは接待プレイというやつだ。

部屋も暖房でいい感じに暖まつてきた頃、ホーム

センターで買ったジュースとお菓子を（僕をつまみにして）食べ尽くした火憐ちゃんと月火ちゃんは、十分に満足したようで、

「じゃ、あたし達は帰るからな」

「じゃあね、お兄ちゃん」

なんて言つて、帰り支度を始めてしまう。

実家で僕の部屋に居座られているときなんかは、さつさと帰れなんて思っていたものだが、不思議なことに、どうもここ数日はそういう感情になれなかったのだ。

玄関で妹達を見送る僕。

「悪かったな。荷物持ちさせて」

「なんだよ兄ちゃん。いいっていいって！　いつでも呼んでくれよな！　まあ、呼ばれなくても来るけどな」

「そうだね。遊びに来ちゃうけどね」

「ああ、いつでも来てくれよ」

本心だった。

いつも一緒に居た妹達と離れるのは、やはり、それなりに寂しいものがあるのだ。

「じゃあな、兄ちゃん！」

「気をつけて帰れよな」

僕はわざと、ぞんざいに言つてしまう。

「ああ、大丈夫だよ兄ちゃん」

「うん、大丈夫だよお兄ちゃん」

いつもより多い、名残惜しいやりとり――

「あ」

月火ちゃんは、ちよつとわざとらしく、何かを思い出したようにポンと手を叩く。

「どうしたんだ、月火ちゃん？」

「さよならのちゅー、してもらわないと」

本当にいたずらつぽい目で。

「あ、そうだな。ちゅーだちゅーだ！」

とても無邪気な目で。

「ば、馬鹿。おまえらもいい年なんだから、もうそんなのできるか」

いつもなら、今までなら、こんなことでやつつけられたりしなかったのに。やっぱり環境が違うせいかもしれない。

「ちえー」

「ちえー」

いつもと違うのは、僕だけじゃなかったみたいだった。

「……………」

「……………」

妙な間ができてしまう。

「まあ、その分、戦場ヶ原さんに一杯してあげるんだよね」

不自然な間を埋めるようなタイミングで。でも、すぐに僕達は、いつものペースに戻る。

「あはは。えつちだなあ、兄ちゃんは」

「えつちだなあ、お兄ちゃんは！」

「もういいって！ 勘弁して！」

そんなこんなで、最後まで、妹達にやつつけられ

てしまったけれど、

「本当に、気をつけて帰れよな」

なんて、やつぱり、ちよつと心配になってしまう。

「うん。大丈夫だよ」

「ああ、大丈夫！」

「じゃあな」

八段抜かしくらい（ていうか階段に一回しか足をついてなくないか？）で、勢いよく階段を降りる火憐ちゃんと、和服の割に、とてとてと器用に降りる月火ちゃん。

僕は部屋を出て、二階の廊下から見送っていた。

妹達がすぐ先の角を曲がって見えなくなるまで。

二つ並んだ仲のよい長い影が見えなくなっても、ずつと。

しばらく。

呆けたように。

外はいつの間にか夕焼けで、電柱の影が、近隣の家影と陰がその存在を強く——けれど、儚げに主

張っていた。

綺麗な風景だった。

けれど、それは寂しさを後押しするような気がして。

だから。

——ボタン。

僕は扉を閉め、部屋に戻る。

妹達を見送っている間、ずっと扉を開けっぱなしだったから、部屋は冷えきってしまった。

扉を閉めると一気に空気が変わり、本当に寂しくなってしまう。

今は、部屋に一人なのだ。

なんだかんだと、ここ数日は人が入り浸っていたから。戦場ヶ原がずっと一緒に居てくれたから。これまではいつも忍が居てくれたから。

久しぶりの一人きりだった。

色々と冷静になってしまふ。

——人間強度が上がるなあ。

黒歴史である。

まあ、止めておこう。今はそれなりに僕も更生したことだし。

うん。

しかしあいづら、火憐ちゃんと月火ちゃん、大丈夫かな。気をつけろとは言ったけど……。

でもまあ、冷静になってみれば、気をつけろって言ってもな。火憐ちゃんは言うまでもなく、月火ちゃんも、家にあるボールがへたってきたから新調するんだとか言って、結局、本当にホームセンターで新しいの買ってたし。むしろあんな奴らにエンカウントしてしまう暴漢に同情する。

それより、あんなん持ってて補導されないのだからか？

ていうか、ボールがへたるって、どういう使い方をしているんだか——

なんて。

なんて、妹達のことを考えると一人なのを忘れら

れる。

でも、それも一瞬だった。

だから、できるだけ幸せなことを考える。逃避なのかもしれないけれど。

戦場ヶ原。

ヶ原さん。

ひたぎ。

引越し初日から昨日まで、ずっと戦場ヶ原は居てくれた。僕と一緒に居てくれた。

そういえばここ数日の戦場ヶ原は、やたらと甘えたような感じだったけれど、ひよつとしたら、僕が寂しがるのをわかっていてそうしてくれたのだろうか。慰めて^{なぐさ}くれていたのだろうか。あいつ、そういう優しさについては相変わず素直じゃないところがあるからな――

口元が自然に緩んでしまう。やはり幸せな気分になれる。寂しさもかなりまぎれるような気がする。けれど、寂しさは倍増したような気もしていた。

戦場ヶ原、電話をくれるって書き置きに書いてくれていたのになあ。

やつぱり、こつちから電話してみようかな。

――いや。

西日が入る、賑やかな妹達が帰ってしまった寂しい一人の部屋。部屋数の多さがそれを際立たせる。僕はシンクの前に立ち、妹達と一緒にホームセンターで買ってきた鍋を洗っている。まだ最低限の炊事道具しかなかったから、本格的に自炊はしていないけれど、こうシンクの前で洗い物なんかをしていると、なんだか一人暮らしを実感する。

寒いからお湯で洗っていた。「お湯で洗いのすると私の玉のようなお肌が、白魚のような手が荒れちゃうのよね。だからちよつと手を撫でて癒^{いや}して頂戴」なんてふざけたように言う、戦場ヶ原のとてもいい表情と声を思い出していた。

シンクの前の廊下に面した窓の曇りガラスは、オレンジ色の斑模様^{まだら}だった。

一人だと、なんて寂しい色なんだろう。

戦場ヶ原と一緒に下校したときの夕陽の色は、確かに切なかったけれど本当に好きな色だったのに。

戦場ヶ原と、初めてあの学習塾跡へ向かったとき、あんなにも（色々な意味で）ドキドキした色だったのに――

はあ。

まあ、いつまでも感傷に浸っていても仕方がないし。

さて。

戦場ヶ原も、さすがに今日は来れないだろうしな。

うーん、夕飯どうしようかな。

ここしばらくは戦場ヶ原と外食というかデートだったけれど、今日は一人だしな。食材も買ってきてないし、こんなときのための（ていうか、さっきのホームセンターで火憐ちゃんがやたらブッシュしていたカレー味の）カップ麺にしておくか。

あるいはコンビニ弁当か。でもこの部屋って実家

より更に田舎だから、コンビニも結構遠いんだよなあ。実家付近でも、コンビニの数はそんなに多くないのだけれど。

そんなことを、あれこれ考えていると――携帯電話が鳴る。

戦場ヶ原の着信音だった。

戦場ヶ原と、お揃いの携帯電話だ。

僕は手を拭く時間も惜しくて、濡れたままの手でかわず携帯電話を取ると、「あ、阿良々木くん？

――暦？ 今大丈夫かしら？」なんて、いつもの声

が聞こえてくる。

いつもの、戦場ヶ原の声。

電話越しでも落ち着く声だ。

僕が、一番安心する声だ。

けれど、僕の心臓はむしろ、激しく動いてしまっていた。

「ああ、大丈夫だよ」

できるだけ心を落ち着かせて対応する。もう付き

合ってそれなりの期間なのに、なんでこんなにドキドキしてしまうのだろう。

「今日はごめんなさいね。急に行けなくなってしまうって」

「あ、いいいいよ」

「それと、色々、その、お掃除とかさせちやったわよね」

電話口でも、本当に申し分けなさそうにしているのがわかる。

「馬鹿、気にするなって」

「……ん、うん。そうね。ふふつ、やつぱり、曆、

優しいわね」

「ああ、僕はいつでも優しいさ」

少し低めの声で、格好をつけて言ってみる。

僕は戦場ヶ原が相手だと、どうしてもたまに、こんな馬鹿げた、どうしようもない、くさい台詞言ってしまうのだ。台詞自体を言いたいというよりも、その反応を知りたくて。

「もうっ！ またそうやって——ふんっ、で、結局、今日はどうしたの。買い物には行つたのかしら？」

この、途中から、無理矢理強がつたクールな口調になるのが、すぐくたまらないから。

「ああ、妹達と、ほら、あのホームセンターに行つてきたよ。鍋と、ちゃんとお勧めの電気ケトルも買ってきたぜ」

「ふふ、偉いわね。もう——ずっと私、ヤキモキしていたのよ。ひよつとして、私にお料理作って欲しくないのかしら、なんて」

「そんなこと、あるわけないだろ」

買いに行けなかったのは、言い出せなかったのは、むしろ逆の理由なんだから。

あまり舞い上がって、呆れられても嫌だしな。

「ふふ、妹さんとのデートは楽しかった？」

「まあな。あいつらと一緒に買い物なんて行つたの、久しぶりだったし。ん、ひよつとして妬いてくれた？」

「まさか」

ちよつとむくれたような声。

「ま、そりやそうか」

ちよつと残念な僕。

「……なによ」

やっぱり、ちよつとむくれたような声。

……………。

「ふつ、くくつ」

僕は戦場ヶ原の、むくれた可愛い表情を思い浮かべてしまい、我慢できずに笑ってしまう。

「もうっ！ 最近、本当にすぐそうやって——はあ、まあいいわ。ええと、じゃあ、その、予定をすっぴかしちゃったおわびに、夕ご飯でも作りに行きたいのだけれど、もう用意しちゃっているかしら？ それに、ほら、新しい鍋とかも使ってみたいし」

「お、本当？ まだだよ。丁度、カップ麺でも食べようかなんて思ってたんだよ」

危ないところだった。あと十分も遅ければ、カツ

プ麺を食べてしまっていたかもしれない。

「ふふ、よかった。じゃ、もう近くだから、すぐ行くわね」

「え、近くなの？」

「ストーカーみたいでいいでしょう？ 愛されているわね」

「馬鹿。じゃ、迎えに行くよ。今、何処？」

「ふふつ、いいわ。大丈夫だから」

すぐに、いつものように一方的に電話を切られてしまったのだけれど、大丈夫って言ってもなあ。もう夕方だし、子供じゃないとはいえなあ。うーん、やっぱり迎えに行くかな。

そんなことを思い、とりあえず外に出ようと上着を羽織ったところで、呼び鈴が鳴る。

玄関を開けると、大きな（お泊まり道具の入っている）バッグと、この部屋から近くはないスーパーで買った食材を持った戦場ヶ原が居た。

「なんだ、こんなに買ってきてくれたのか。おい、

荷物多いな。重かつただろ。呼んでくれれば良かったのに」

「んふふ、いいのよ。驚かせようと思って」

いい笑顔で。

それにしても、ちよつとした旅行みたいな風体だなあ。まあ、スーパールの袋を持って旅行はしないけれど。

「そういえば今日は、どうしたんだよ」

荷物を受け取り、僕はずつとずつと、本当に気になつていたことを、電話では言い出せなかつたことを、できるだけ自然に訊ねた。

「ごめんなさい。ちよつとデートしてきたのよ。だから、これはおわびの意味も込めてね」

戦場ヶ原は手袋を外し、コートを脱ぎながら、いつものように、何でもないことのように言つた。

「なんだよ、また神原かよ」

僕は、戦場ヶ原のコートを受け取り、ハンガーにかけながら呆れたように言う。

ふう。なるほど。

そうなのだ。この女、男にも女にもモテモテなのだ。つうか一時期、羽川とも頻繁にデートしてたらしいしなあ。ていうか付き合い始めの頃は、神原と関係が戻つてからは、僕とのデートなんて二の次だったしな！

うん。あのときもそうだったよな。

うんうん。

はあ。びつくりした——ふう、僕もまだまだな。うんうんうん。

戦場ヶ原を、ちよつとでも疑うだなんて。

「ん、何を言っているの。男よ。大体、神原とデートする日は、スケジュールにちゃんと入っているし」

………そつけなく、何でもないことのように言う。

いつもの悪戯いたずらっぽい目や、たまに見せてくれる、邪悪なそれではなく。

「え！」

そんな目を見て、思わず、呆然としてしまう僕。

「モテるのは、阿良々木くんだけの専売特許じゃないということね。私だって、それなりにはモテるんだから」

——知ってるよ！ つーか、それなりどころじゃねえだろ！ どれだけ僕がそれにヤキモキしてると思ってるんだよ！

「いや、ひたぎさん。ちょ、ちよつと。じ、冗談だよね？」

素で、戦場ヶ原の名前をさん付けで呼んでしまう。
「ん？ あら、そんなに慌てるなんて。本当、かわいいわね」

邪惡な、最近はそれに加えて、本当にかわいい笑顔を重ねてくる。

「なんだよ、もう。冗談かよ」

そんな表情を見て、ちよつと安心する僕。

「でも、男とデートしていたのは本当よ」

ひたぎは、真面目な、冗談ではない本気の目と言う。

「！」

僕は、あからさまに動揺してしまう。

「……………お父さんとだけねど」

ちよつと僕を睨むように。切れ長の美しい目で。いまだに僕をドキドキさせる目で。

「そんなに、信用されていないのかしら」

出会った頃のような、少しクールな声。

「馬鹿！ おまえな、ひたぎ……僕はな、本当に心配だったんだよ。電話くれるっていったのに、なかなかくれないしさ——」

最後の方は、子供のようにむくれた声になっていたかもしれない。

僕の嫉妬に満足したひたぎは、甘えて抱き付いてくる。絡めてくる手はとても冷たかった。僕の頬に触れる柔らかな頬も本当に冷たかった。

「ひたぎ——こんなに冷えちゃってるじゃないか。」

僕はな……」

僕のことをいじめて嬉しくせに、ちょっとやりすぎたって顔をしてるくせに、それでいて照れて恥ずかしいくせに——だから、ひたぎは僕の台詞を強引に遮る。

柔らかくて。

暖かで。

いい匂いがある。

ひたぎの味を直接感じる——

僕はそのまま、強く抱く。

唇を離れたひたぎは熱い視線で僕の目を見つめ、「ごめ……ごめんなさい。本当は、もっと早く連絡するつもりだったのだけれど、その、お父さんに会うなんて、ちょっと恥ずかしいし、タイミングが、ね、ずつと、この部屋の近くまで来るまで、ね、ずつと迷って……」

おかえしに、僕は無言でそんな言葉を遮り、深く絡めて熱を持った感情と液体を吸い——流し込んだ。

特別な感情を伴った液体を交換する。

冷たい手を僕の手で包み、僕の身体とひたぎの身体に挟む。冷えきった手が少しでも暖かくなるように。

オレンジ色の光が、ひたぎの整った顔に深い陰影を付けていた。その赤みを帯びた頬は夕陽だけのせいではない。それは本当に綺麗で——古い映画の、ずつと語り継がれる印象深いシーンのようだった。

僕は、不謹慎にも、その美しさが欲しくなる。
有体ありていに言えば——そのまま押し倒したくなる。

抱きたくなる。

セックスをしたくなる。

唇を、舌を離すと、二人の液体が糸を引いていた。キラキラと光っていた。いやらしいのに、とても綺麗に。

「ん」

そんな僕の唇を白魚のような手で、柔らかな指で撫でてくれる。

僕は、我慢ができなくなる。

「ん、こんなにしちゃって。駄目よ」

ひたぎは柔らかな下腹部で、僕をめり込ませるように押し付けたまま——いたずらっぽい目をして言った。

「駄目？」

僕はひたぎの細いくびれた腰を抱きながら、僕の想いを伝えるように、強く押し付けたまま言う。

こんなときいつも思うのだが、この女、本当に腰のくびれがすごいのだ。

本当にいつも思うのだが、この細いくびれのどこに内臓が入っているのだろう。入っていることは確かなのだけれど、毎日のように何度も何度も直接確認はしているのだけれど——それが信じられないくらいプロポーションなのだ。それは大人っぽい黒のワンピースでより増幅され——そのなめらかな布の感触は、更に直接肌のぬくもりを、更に奥深くにある直接の熱さに触れたくさせる。

今すぐに熱い内臓の存在を——そのぬめって柔らかなひだの感触を、粘膜の感触を確認したくなる。

いつものように、触れたくなる。

いつものように、愛したくなる。

いつものように、一つになりたくなる。

だから、僕は更にひたぎを強く抱いた。壊してしまいたいくらいに。いつもその熱さを確認する前のように。熱さを交換する前のように。お願いをするときのような——すぎるような目をしていたかもしれない。

「——駄目。ご飯の——用意、するんだから」

ひたぎは潤んだ目で辛そうに言った。その癖——僕を強く抱きしめてくる。

僕もひたぎも体温が上がっている。それは、暖房が効いてきて部屋の温度が上がったせいだけではなく。

下半身がもやもやして、原始的な衝動に駆られる直前だった。けれど——けれど、僕は少しだけ大

人になったからだろう。そこまでは至らなかった。
でも、なかなか離れられなくて、そのまま数分の間
——ずっとキスをしたまま抱き合っていた。

身体を密着させ体温の交換を続ける——

二人の上着が擦れあう音を感じる——

服と下着が擦れあうのを感じる——

服の上から身体の形を感じる——

柔らかで暖かな熱を感じる——

強く抱き合い絆を感じる——

激しい心音が聴こえる——

体液の交換を続ける——

心を通わせ続ける——

髪に手を入れる——

匂いを感じる——

味を感じる——

愛しい想いで一杯になり、溢れそうになる——

離れられない。

絶対に離さない。

この女とは、絶対に離れたくない。

そんな中、何かをやつとのことと決意したように、
ひたぎは言う。

「はあつ……さて。用意するから、こよみは——ん
っ、唇はテレビでも見ながら待つて頂戴」

途中で甘い声がいづもの——いや、いつもよりク
ールな声に変わる。

「うん。ひたぎの後姿、見ながら待つてる」

でも、二人の身体は離れていなかった。

「ふふん、いい子にして待つていなさい」

ひたぎは名残惜しげに僕から身体を離すと、持つ
てきた大きなお気に入りのバッグからエプロンを取
り出し、食事の用意を始めた。このバッグには本当
に色々なものが入っているのだ。お気に入りのちょ
つと高そうなドライヤーとか、可愛いパジャマとか。
ていうか初日から泊まる気満々だったもんな。

ひたぎの手際良く小気味良く料理をする姿——僕
はそれを見ているだけで楽しいのだ。いつもの馬鹿

な話をしながらだから、それは尚更で。

時々振り向いて突っ込みを入れてくれたり、例の得意顔で突っ込みを待ったり。

二人でいつものように、笑いながら。

ひたぎのいい笑顔に、幸せを感じながら。

004

僕達は二人並んで、狭いシンクの前で食器を洗っていた。

時々、腕がコツンと当たると、二人でちよつと照れたようにはにかんでしまう。こんな、なんでもないことが——二人だととても幸せなのだ。

でも、二人だと、あつという間に洗い終えてしまう。

「ねえ、こよみさん」

「なんだい、ひたぎさん」

こんなときにふざけると、なぜか名前をさん付けで呼ぶ。僕達の最近の流行りなのだった。

ひたぎさんはエプロンを外してから、僕の後に回り、抱きついてくる。

僕の肩に顎を乗せる。

僕を抱く力を少し強める。

そして、耳元で、

「今日は、いえ、今日も——ええと、泊まっていっていいかしら」

なんて、囁く。ささや

いつも僕を癒やしてくれる、柔らかなふくらみの感触、きゆうつと僕を抱きしめてくるモデルのような細い腕、半分くらい吸血鬼である僕をも魅了する甘い声、さらさらでいつもいい匂いのする髪——

一体、この女は、僕をどうしようというのだろう。「え、あ、も、勿論いいけど、お父さん、大丈夫なのか？」

思わず動揺して、いいけど。なんて言ってしまったけれど、本当は、僕の方から土下座してでも頼みたいくらいだった。

「ん、またしばらく忙しいみたい」

僕に、頬をすりすりとしながら。

「そっかあ。大変だなあ」

「だからね、ひたぎちゃん……。寂しいんだって」

本当に、寂しように。

本当に、甘えて。

まるで子供のように。

あの大人びたひたぎが。

いつも甘えさせてくれるひたぎが、昔は心を表に出さなかった、出せなかったひたぎが。

こんなにも、露わに。

心を剥き出しにしてくれている。

だから僕は、剥き出しにされた敏感で大切な部分に触れるように、ひたぎの手を取る。

ひたぎは指を絡めてくる。

「こよみ——ねえ、こよみ——」

甘えた声で僕の名を呼びながら、絡みあった手そのままだに、器用に僕を後に向かせ、キスをねだる。

……………。

「……ん——ん……んふっ……んくう……」

——んちゅ。

——ぴちゅ——くちゅ。

少しいやらしい音だけが、静かな部屋に漂う。ただよ

……………。

……んふっ——はあっ……。

深いキスが続く。

お互いの体内を、表面より高い温度とぬめりを確認しあう。

愛しあう。

息が続く限り。

苦しくなる、手前まで。

苦しくなっても。

限界まで。

ずっと。

「ぷはあつ」

「ふうつ。ねえ、こよみ。もつと——んううつ」

何度も。

何度も。

何度も。

「んふう……はあつ、こ、この酸欠で意識が飛びそうに……はあつ、なる手前がたまらな——はあつ、はあつ……たまらない、わね」

ひたぎは、もう、本当にふらふらになっていた。

基本ドSなのになんでこんなにMなんだよ！ ていうか震えてるじゃないか。

ていうか、二人とも興奮してるから、鼻だけじゃ、もう呼吸が間に合わないんだよ！

「はあつ、はあつ、馬鹿。こんなの本当に……はあつ、死んじゃうつて！」

「んふふ。なんだか——ちよつといけないことをしているみたいで、ドキドキするわね」

「いけないことつて……」

「ふうう」

「おい、大丈夫か？」

ひたぎは倒れそうになり、僕に震えた身体を任せてくる。

「はあ、ええ、ふう、ごめんなさい。はあつ、ちよつと——ちよつとだけ、いつちやつたかも——」

「えつ」

「本当、いけないこと——しちゃったわね」

苦しそうな顔なのに、につこりとしながら、甘えながら。

「もつとも——私は、ふふつ、いつちやつただけれど」

「うまくねえ！」

そんなことを言いながらも、愛しくて、こんなにも細いのになんて柔らかな身体をぎゅつと抱きしめてしまう。

「でもまあ、いけないことかな」

僕はひたぎのさらさらの髪に、甘えるように顔を埋めるようにしてから、言った。

「ん？」

ひたぎは可愛く、小首を傾げる。

本当に油断しているときにしか、見せてくれない仕草だ。

「僕もさ、いけないことつていうか、ちよつと親には引け目があつてさ」

「引け目？」

僕の目を見ながら、少し考えるような表情をして。そして、すぐに。

表情が変わる。

「ああ——なるほど。まあ、そうよね。女を連れ込みたいから一人暮らしさせろつて言ったのか。なんと言われたら、言い返せないものね」

ひたぎはいつもみたいに僕をからかうように、冗談のように、邪悪な笑顔で——出会った頃のようにクールな調子で言った。

でも、僕は、

「……そうなんだよ。実際、その——ええとさ、その、やつぱ、そういう部分があるから……」

照れながら、真面目に答えてしまう。

ちよつと驚いたような顔をしたひたぎは、僕に強く強く抱きつき、照れたようにして、

「もう——いやらしい男」

と言った。

甘えた声で。

蕩けきつた声で。

——僕は、更に照れてしまう。

「はあ。いやらしいこよみさんは、女の子を部屋に引きずり込んで……。まったく一体全体何をしようというのかしら」

「そ、そんな言い方しなくてもいいじゃないか」

「ん、でもひたぎちゃんは、色々と言う事聞いてあげるらしいわよ。約束をすつぽかして、男とデートしてきちゃった引け目があるのかなんとかで」

「え、ほんとに？」

僕は本気で食い付いてしまう。

「ちよつと。なにそんなに食い付いているのかしら。変なブレイとかは嫌よ。あの、その、ええと、浣腸ダイエツトとか、あ、あれは冗談だからね」

少し引いたように言う。

そっかあ、やつぱ浣腸ダイエツトは駄目か——いや、別に興味ないけど！ ていうかダイエツトものにも、ひたぎは痩せすぎ、というか完璧だし。本当に無駄なところがなくて、付くべきところは付いてるし……。でも、もう少し肉付きがあつてもいいよな気はする。一番太つたとき（それでもかなり痩せてる部類だと思うけど）だつて、お腹とか肉つまめなかつたんだぜ。もつとも、つまもうとしたら半分本気でひっぱたかれたけれど。涙目で。

——それにしても、ひたぎにしてみらいたいことか。となると、やつぱり、あれだよな。

「ええとさ」

ちよつとドキドキしながら。

「なあに？」

優しいけれど、ちよつと不安げな声で。

僕はすぐドキドキしながら、

「……………膝枕、してくれないか？」

と、言つた。

「ん？ いいわよ。じゃ、あつちでね」

ひたぎは嬉しそうに僕の手を取り、すたすたと奥の畳部屋まで僕を引っぱる。

キッチンでは床に座るわけにはいかないし、炬燵のある部屋は炬燵が中央に鎮座していて狭いから、奥の畳部屋なのだろう。この部屋は寝室として使っていて、普段ふすまを閉めたままにしているので、今はかなり寒いはずだ。

ひたぎは布団の前、畳の上で正座をして。

んふふ。なんて、につっこにこしながら。

ぽんぽんと膝を叩いて、

「おいでなさいな」

なんて言ってくれる。

僕は言われるままに、ひたぎの膝に頭をのせた。

畳は冷たかったけれど、ひたぎは本当に暖かで、
思わず、

「ひたぎ、暖かい——」

なんて、口にしてしまう。

「こよみも暖かいわ。部屋が寒いから、なおさら尚更ね」

そんな言葉に、そんな表情に、そんな温度に、そんな柔らかさに、僕は我慢がでずに膝を頬ですりすりとしてしまう。

「ん、なに。甘えちゃって」

そんなことを言う声はとても甘くて、僕は溶けそうになってしまっていた。

「だってひたぎも甘えてきたから、おかえし」

僕は身体を反転し、ひたぎのお腹、下腹部を頬ですりすりとする。

「ちよつと、嫌っ！ えっち！ くすぐりたい！」

腰のあたりから、脇腹をまさぐる。

「ちよ、ちよつと、駄目！ 本当にくすぐりたいから！ お願ひ、嫌！ あんつ、いや、あははは、もう、馬鹿んつ」

ひたぎは、ふざけて僕から逃げようにして、布団の上に寝転がってしまっていた。

僕は、布団にひたぎを押し倒してしまっていた。

もう何度もこんなことをしているのに。

こんなことになってしまうと、やっぱりしばらく、無言になってしまう。

静かな時間が過ぎる。

お互いの心音が聴こえる。

何故だか静かにしなければならぬような空気になる。

「ね、こよみ。服が皺しわになっちゃうから……」

秘密のことを話すように、ヒソヒソ声で言う。

「あ、ああ。そうだね」

僕も同じく、ヒソヒソ声で。

秘密を共有するように。

——それは二人だけの秘め事だから。

僕達はそのまま服を脱いだ。さすがに服を脱ぐと、この部屋は震えるほどに寒い。

だから、すぐに布団に入る。

布団の中で、すぐに抱き合う。

「ん、冷たいっ」

ひたぎは、冷たい布団に触れ、ぴくつとする。柔らかな身体で僕を締めつける。

「一緒に暖めよう」

僕はちよつと腕がつりそうになりながら、ひたぎから離れないようにして、厚手の毛布と掛け布団を、二人の肩の位置まで上げる。

柔らかで暖かな身体に覆い被さるようにして、ぎゅつと抱きしめる。

体重をかけすぎないようにして、体重をかける。

二人の距離を零にするために。

「なにキザな台詞を言ってるのかしら」
おでこを僕のおでこにコツンとして。

「へへ、ごめん」

「そんな台詞、絶対に私の前以外では言わないで頂戴」

僕の頬を両手で抑え、視線を一ミリもずらさないようにしながら。

ひたぎの視線に居抜かれた僕は、その美しい瞳に吸い込まれそうになる。

「勿論だよ」

「んふふ、格好いいわ——本当に……私の前でだけだからね」

「約束する」

そんなことを言いながら。

お互いの身体に触れあう。

二人はじゃれあつて。

二人は抱き合つて。

二人の体温が、布団の中の温度を上げる。

二人の温度は、身体を擦りつけあっている部分から上昇する。

それでも、少し身体の位置をずらすと布団に冷たい部分が残っていて、そこに触れた瞬間、身体がピクリと反応してしまう。でも、すぐに、そんな部分も少しずつ暖かくなる。それだけ二人の体温が上がっていたのだ。興奮していたのだ。

僕とひたぎは、布団の冷たい部分を僕達の熱で埋めていくように絡みあう。

ひたぎはとても柔らかだった。

とても暖かだった。

とてもいい匂いがした。

もう、何度も何度も触れているはずなのに。

どうしてこんなにも――

「こよみ、あつたかい」

ひたぎも僕に熱をくれるように、僕から熱を奪うように抱き付いてくる。

裸で抱き合うと、こんなにも暖かくなるのか――雪山で遭難したときに、裸で抱き合う意味がわかったような気がする。

そんなことは、何度も知っているはずなのに。

「ひたぎも、あつたかいよ。柔らかいし、幸せ」

「私も幸せ――」

「ねえ、おっぱい、いい？」

確認すると同時に返事を待たず、僕は布団に潜り込む。少しだけ、外の冷気が布団の中に侵入する。

「もう、本当におっぱい大好きなんだから」

呆れたように。

折角、いい雰囲気だったのに――なんて言いたげに。

ひたぎは僕の頭を撫でながら、嬉しそうに言うのだ。

僕は何度も――それこそ毎日のようにしているのに、それを前にしてしまうと必死になる。必死になつてしまう。本能なのだろう。この柔らかで優しい膨らみに顔を埋め、敏感で感触の異なる、段々と硬くなる、僕の口の中で少しかだけ大きくなる先端を舐め、甘噛みする。ひたぎが痛いという直前まで、齒

型が尽く直前まで。その感触を堪能する。

「んうう」

苦しそうな声で我に返る。

「ご、ごめん、痛かった？」

「ん、ちよつとね。ふふ、本当、最近は絶妙ね。最初の頃は痛くてしよがなかつたわ。でも、あまりキスマークは……んうつ」

僕はその弾力が増し、ちよつとだけ膨らんできた先端を、舌と歯で優しくしごくようにしてから、少し強めに噛んでしまう。

ひたぎはそれにダイレクトに反応して、身体を弓なりにする。同時に布団に入り込んだ冷気が、二人を少しでも冷静にする。

「っ——痛いっ。馬鹿っ」

「ご、ごめん……」

「しよがない子なんだから」

僕はうつすらと付いた歯型を舐めながら、柔らかさと弾力を堪能していた。ひたぎも気持ちよさそう

にしている。

胸と腋の境界。

胸の谷間。

弾力の違う先端、感触の違うその周辺から、柔らかな癒しの部分。そして、ふもとの境界まで。

匂い、味、感触、温度、形状——全てが好きだ。

僕はそれを言葉にすることができなかった。だから、甘えるしかなかったのである。それで、ひたぎは喜んでくれるから。伝わるような気がするから。

——僕がそんな柔らかで気持ちいい部分に、埋もれ癒やされていると、

「ねっ？」

と、甘えた声で。

ひたぎは柔らかな手で、僕の顔を胸から引き離すようにして言う。

最近、ひたぎはこうやっておねだりするのだ。

「ん？」

こんな僕達に、無駄な言葉は必要なかった。

僕は曖昧に返しつつも、ひたぎの身体を、その官能的な凹凸^{おうち}を、美しくなめらかな感触を、優しい温度を——僕の体表面全ての神経で確認するようにしながら、その身体の上をゆつくりと移動する。ひたぎの柔らかな胸から、ひたぎの蕩けた顔が正面に見える位置へと。

僕の下から、ひたぎの長い足が絡みついていた。

僕の手は、ひたぎの腰と背中を抱いていた。しっかりと離さないように。

「こよみ——ねっ？」

これ以上ないくらい甘い声。

これ以上ないくらいの蕩けた表情で。

無論、僕に抗うことなどできない。

こんなひたぎに抗うことができる奴は、人間ではないだろう。

そう断言できる。

なにせ、半分ほど人間でない僕が言うのだから。

寒いから掛け布団はそのままだった。ひたぎは僕

に絡みつけていた長い足をゆつくりと離し、左右に広げた。僕の目をしつかりと見ながら。掛け布団はテントのように、立てられた足で支えられる形になり、同時に外の冷たい空気がすうっと入ってくる。

少し汗ばんでいた僕達には少しだけ気持ちいいのだけれど、すぐに寒くなってしまうようで、また強く抱き合う。お互いの身体で暖めあう。だから上半身はぴつたりとくっついていてくれるけれど、下半身だけは離れている状態になっていた。僕は広げてくれた足に割り込む体勢だった。だから、そのまま——そのまま深く割り込んだ。押し当てるだけで、ぬるぬるの熱い場所へ自然に。あるべき場所へと埋まる。手を添えなくてもそのまま。僕はそのくらい硬くなっていたのだ。ひたぎの潤んだ瞳を見ながら腰を少しずつ前に移動させると、先端のぬるぬるとした熱さが僕の根本に向かってくる。その深度が深くなるにつれて、ひたぎの足が僕の腰を強く締めつける。ひたぎはその侵入してくる感覚に、目を閉じそうに

なってしまう。

でも。氣丈にも目は閉じずに。

本当に僕を愛してくれている――

そんな潤んだ目をして。

嗚咽のような声を出して。

僕もそれに答えるように、絆を深く打ち込むように――身体を深く埋めた。

ひたぎの足の付け根が、僕の付け根と交わる。

深く深く、杭を打つように。

こんなとき、ひたぎは柔らかくてなめらかな太もと、僕以外は絶対に見ることも触れることもできない、その付け根を、何度も何度も僕の同じ部分に擦りつけてくる。この柔らかな感触と体温が僕にはたまらないのだ。ひたぎを強く抱きしめ、僕も同じ部分を擦りつけること以外、他に何もできなくなってしまう。

僕はしばらく、他の動きができないのだ。

脳が落ち着くまで。心が冷静さを少しでも取り戻

すまで。

.....

ひたぎはそんな僕の頬を撫でてくれている。本当に慈しむような目をして。僕が落ち着くまで、ずっと。

.....

そんな感情の高まりがやつとのことで収まると、僕は動けるようになる。だから、もつと気持ちよくなるために、深くお互いを確認するために、いつものように動いた。

でも。

僕がひたぎの上で動くと、同時に掛け布団を上下させてしまう。そのたびに冷気が入り込んできてしまい、布団の中の温度を下げ続けていた。だから、僕はひたぎと密着することにした。ぴつたりとくつつくことにした。

僕は、その感触に溺れていく。

ひたぎの深みに嵌はまっていく。

「んっ、あつ……んっ」

僕が身体の中を動かたび、嗚咽のように。

「んっ………んっ」

僕がゆつくりと動くと、ゆつくり。

「んっ、あつ、あつ、あつ、ん、ん、あん、んっ」

僕が速く小刻みに動くと、それに合わせて、ひたぎは声を出してしまう。

深くすると、ちよつと苦しそうに。

「んくうっ……」

と。

二人は密着して愛しあう。

隙間を埋めるようにして。

ひたぎも腰を動かしてくれている。

自分からこんなに——というのは本当に珍しいことだった。

むしろ、こんな関係になったばかりの頃の方が、ひたぎは積極的だったのだ。お互いに力加減がわか

らないという、そんな頃の方が。

今は、布団の中で見えないからというのもあるのだろう。

見えないから、その分だけ——とても深く。

「んくう……。こよみ……。大好き」

「僕もだよ。ひたぎ——愛してる」

どうしてももなく愛おしい気持ちから、それをどうしても伝えたくて——僕は思わず、いつものように腕を立てて大きく動こうとすると——やはり布団が冷たい空気を吸い込んでしまう。

「はあっ、ふう——んふふ。やつぱり、ちよつと寒いわね」

ひたぎはぷるぷると震えて僕にしがみついている。体内でも、僕をきゆうつと締めつけていた。密着して汗をかいていた部分があったから、その寒さは尚更だった。逆に、その寒さが今の暖かさを感じさせていることも確かなのだけれど。

「ごめん、くつつくね」

「ええ。もつと体重かけて、いいわよ。ぴつたりくつついて頂戴。えっと、その、私、動くから——」

とても恥ずかしそうに。

こんなにも愛しあっているのに、もう何度も全てを見せあっているのに、直接、僕自身を体内に取り込んでくれているのに——ひたぎは恥ずかしそうに途中から僕の顔を見ないようにして、耳元で囁くように言う。

「うん、お願い。ひたぎ——」

そんなひたぎを、僕は、愛おしくてどうしようもなくなる。

「ん？」

「愛してる」

「馬鹿。私も」

……………

ひたぎは、僕の下で僕の体重の大部分を支えているにもかかわらず——官能的な動きをしてくれている。た。

「はあっ、はっ、ふう、はあ、ふっ、くっ——」

「くっ、ひたぎ……」

僕はされるがまま、それを享受していた。

「んんっ、あんっ、んくっ、こよみ、ううっ——」

ひたぎの汗がすごい。さすが元陸上部のエース、そのスタミナは伊達ではなく、汗にまみれながらも僕をいつまでも懸命に愛してくれている——

「なあ、汗、すごいぞ。暑いだろう？ 掛け布団めくるな？」

「はあっ、うん、お願い。んふふっ。こよみは、大丈夫？」

「僕も、暑いよ。汗、すごいだろ」

「ふふ、本当ね」

僕が掛け布団を半分ほどめくると、二人の熱い身体は布団の外の空気にさらされる。それはとても気持ちのいい冷たさだった。

ひたぎは僕の額の汗をぬぐってから、首筋の汗を舐めてくれた。敏感になった肌を舐めるひたぎの舌

は、本当に気持ちがよくて、

「ひたぎっ」

思わず名前を呼んで、深く押し付けてしまう。

「んんっ、こよみっ」

掛け布団が必要なくなるほど体温が上昇した僕達。隣の部屋の暖気も、大分この部屋へと移動してきたのだろう。

だから、僕にはもう遠慮する理由がなくなったのだ。

だから、いつものように激しくひたぎを愛そうとすると、ひたぎは長い足で僕をぎゅうつと締めつける。

「動いちや、駄・目」

甘えた声で。

ウインクをしながら。

「私が、可愛がつてあげる」

久々のDSな表情で。

「あ、うん」

だから、僕は素直に従うしかなかった。

「じゃ、さつきみたいに、ぎゅうつて体重をかけて

頂戴」

「うん」

僕がひたぎに埋まるように体重をかけると、ひたぎは嬉しそうに喘ぐ。官能的な動きがゆつくりと再開する。

僕はされるがまま、あまりの快感に何も考えられなくなる。

だから、

「はあっ、ひたぎ——ひたぎ、ひたぎっ」

荒い息の中、愛する女の名前を連呼することしかできなかった。それに呼応するように、ひたぎは涙が出そうなくらいの快楽を与えてくれる。

動いていないのに筋肉が緊張してしまう。

僕は何度も泣きそうになりながら——許しを乞う。

「うう……ご、ごめんひたぎ。うっ、ちよっ、ちよっと待って……」

そのたびに許してくれる、優しいひたぎ。

「ん。出ちゃうのかしら？」

「……うん」

「ん、許してあげる。んふふつ。大丈夫になるまでいい子いい子してあげるから」

僕の頭を撫でながら、子供をあやすようにしながら。

「……うう、うん、ごめんな」

何度も、何度でも。

僕は柔らかな胸を愛撫しながら、身体から溢れそうな感覚が落ち着くのを待つ。

……………

「ひたぎ、もう大丈夫。今度は僕が——」

「んふふ。駄目」

「駄目？」

「そう。駄目。今は私が……ね」

今度はゆつくりだった。

快感がじわじわと続く。ゆつくりと昇りつめる感

覚。いつもは僕がしているのに。されるのは、してもらうのがこんな感覚だったなんて。

今までも勿論、こんなことはあったけれど。今日は——

……………

ひたぎはゆつくりと、僕を愛してくれている。

油断して、優しい蕩けた目をしながら。さっきまでドSな表情をしていたのに。

僕は動くことを禁じられていたから、深いキスしかできなかった。

ひたぎの熱い舌、柔らかな唇を愛した。その裏も表も。

ひたぎの綺麗な歯を愛した。ひとつひとつ、その隙間も。

ひたぎの口腔を届く範囲で、全てを。

「……んふつ……くつ」

「……んっ……うっ」

どれだけの長い時間だったのだろう。そのなだら

かな上昇は——気付けばいつのまにか限界まで達していた。頭がぼおつとして、もう何も考えられなかった。だから、僕にできることは、またひたぎに甘えて許しを乞うことだけだった。

ひたぎも、限界に近そうだったから。

とても苦しそうに、気持ちよさそうな表情をしていたから。

とても苦しそうな、気持ちよさそうな声を出してしまっていたから。

でも。

僕は、もっともつと甘えて気持ちよくして欲しかった。

まだまだ、愛して欲しかった。

だから、また、

「な、なあ、ひたぎ——出ちやいそうだよ」

なんて言って、甘えてしまう。

「んふふ。駄目——んっ」

「えっ」

「んう、はあつ、んっ——我慢——なさい」

「……ひたぎ、頼む——」

今度は許してくれなかった。腰の動きを止めずに——僕を優しくいじわるな目で見つめながら、蕩けているのにDSで邪悪な笑みを浮かべながら。

僕は必死で懇願した。

「……な、なあ、ひたぎ、許して、も、もう——」

「んっ……しようがない子ね。……んうっ……もう

——漏らしちゃうの？」

僕の頬を撫でながら優しく言う。でも、腰の動きは止めてくれない。

「……んあつ、はあ、はあつ、出ちやうっ！ ご、ごめん！ ひ、ひたぎっ！」

動いてはいけないと言われていたのに、ひたぎの付け根に僕の付け根を、その柔らかな部位が変形するくらいに押し付けてしまっていた。

僕は我慢できなくて情けない声を出し、泣きながら——謝りながらひたぎの膣に射精してしまってい

た。僕の全ての感情をひたぎに流し込んでしまっていた。

その始まってしまった流し込む感覚は——もう自分では制御できない。

強制される動き。

その快楽のために性を重ねているのに。

何度も知っている感覚のはずなのに。

……母親に泣きながら許しを乞う子供のように、僕はひたぎにしがみ付いていた。

——それでも、射精は続く。

あまりの快感に、僕は涙が止まらなかった。

あまりの快感に、僕は声も出せなかった。

「……んうう——んっ、ああっ——んふふ、ちよつと、そんなにぎゅつてしないの……。はう、ふう、あらあら……。こよみつたら——ごめんね」

——なんて、優しく言われながら。

優しく、涙をぬぐわれながら。

僕は——やつとのこと、ひたぎの膣での射精を

終えるのだった。

その後もずっと、ずっと——優しくしてくれたひたぎ。僕はその後、二回も我慢ができなくて——ひたぎに謝りながら出してしまっていて——

そんなひたぎも、さすがに疲れて動けなくなっていた。男の体重を支えながらの行為がどれだけの体力を消耗するか——

「…………はあっ、ふうっ、はあっ——ちょ、ちょっと疲れちゃったわ」

実際には、ちよつとどころではないだろう。上に乗っていただけの僕でも、これだけ消耗しているのだから。

だから僕はひたぎに強く抱きつき——強引に身体を横に向ける。

「あんっ」

ひたぎの髪が長かった頃には絶対にできなかったことだ。二人で横向きに抱き合う形になる。これ以上ひたぎに負担を強いるわけにいけないから——

僕は、急激に下がってくる体温を補うため、掛け布団を掛け直しながら謝る。

「……はあつ、はあつ、はあつ——ごめんな、重かつただろう？」

ひたぎは僕の髪をいじりながら、額の汗を拭^{ぬぐ}ってくれながら、

「……………んふふつ——ふうつ、はあつ……でも、気持ちよかつたでしょう？」

と、激しい息と汗と鼓動の中、優しく言ってくれる。

「……………うん」

僕はちよつと恥ずかしくなつてしまい、照れながら視線は外してしまいがら答えた。

「……………いつもは——ふふつ、こよみがしてくれているのよ」

息が落ち着いてきたひたぎは、そんなことを言いながら、僕を押し倒すように仰向けにして——いつものように僕の胸にもたれかかり、甘えてくる。

ひたぎの形のいい胸が、僕の身体に沿うように変形していた。ひたぎのしつとりとした肌が、僕の身体に密着していた。僕はこんなにも全てを見せ甘えてくれるひたぎが、もう、愛おしくて愛おしくてたまらなくなってしまう。

「んふふ——やつぱりこれが一番いいわね」

「ん、ひたぎ、これ好きなの？」

「ええ。よくあるじゃない？　こんなときに女が男の胸にもたれかかるシーン。そうね。ほら、ゴルゴ13とか」

ゴルゴかよ！　いや、僕ゴルゴ13大好きだよ？　さいとう・たかを先生は渋くて好きだけれど。

それでも言わせてもらうけれど、本当にひたぎの濫読^{らんどく}っぷりは酷いな。

「まあ、確かにゴルゴ13でもあるだろうけどさ。もう少し少女漫画とかさ——」

「嫌よ」

即答だった。

一切の迷いのない。

こういう所は本当、変わらないよな——

僕はそんなひたぎが愛おしくて可愛くて——髪をくしゃくしゃつとしながら——強く抱きしめてしま
う。

「嫌ならしやうがないけど」

ひたぎは抱きしめられるのを、髪をくしゃくしゃとされるのを、気持ちよきそうにしながら、

「——だって……。照れくさいじゃない……」

なんて、言い——僕の胸に顔を埋めるようにして
恥ずかしがる。

「……………」

僕はゴルゴばりに黙るしかなかった。

この女、どんだけ僕を萌えさせるんだ！

というか正直なところ、未だに照れる基準がよく
わからないのだけれど。

「……で、こんなシーンがどうしたんだ？」

だから、僕はひたぎのことをもつともつと知れた

くなる。話を訊きたくなってしまふ。

「……まあ、なんていうか——こういうシーンって
馬鹿馬鹿しいと思っていたのよ。昔はそれこそね、
その——私は——こよみは知っているでしょう？

乱暴された後に、こんな気持ちになれるなんて、思
いもしなかったわ」

少しだけ悲しい目をして、遠くを見るようにしな
がら。

「ああ、そつか——」

だから僕は、また、ひたぎを強く抱く。

ひたぎも、細くて長い足を僕に絡ませ、身体全体
で僕を抱きしめてくる。

「ふふつ、でもね——なんていうか実際にね。こん
な風になると、やつぱりね」

いつの間にか、照れ照れになって「えへへ」なん
て、くねくねしているひたぎ。僕と目が合うと「や
だ……」なんて言って顔を真っ赤にしながら——恥
ずかしがって、くねくねと布団の中へと潜ってしま

う。

僕はそんなひたぎが愛しくて愛しくて愛しくて愛しくて——だから、無理矢理布団から引っぱり出し、上にのしかかった。

「——ちょ、ちよつと嫌つ」

ひたぎは恥ずかしそうに、慌てながら言う。

「駄目？」

僕はどうしようもなく硬くなった部分を、ひたぎの柔らかでぬるぬるの部分に当てながら訊いた。

「——そんな、わけ……ないでしょう」

そんなことを言いながら、目を瞑^つつてキスをねだる。

僕はねだられるままにキスをして、愛撫をした。

柔らかな胸を。

僕の先端が当たっている、見えないその部分を。

ひたぎは本当にスレンダーで、おっぱいとお尻以外の無駄な肉は本当に少ないのだが、この部分はそうではなく——だから、ほんの少しだけ深くにある

のだ。だから、とても柔らかな肉を広げてやらないと小さくて敏感で気持ちいい部分に当たりづらい。それに気付いたのは本当、最近のことだけれど。

でも、僕がその部分に触れると、ひたぎは本当に恥ずかしがって僕の顔を見してくれない。

今もそうだった。

僕の首の付け根に顔を埋めている。

僕の肩を甘噛みしている。

僕はひたぎの耳元で言う。

「今度は僕がするよ。離れないように、するからね——」

「……………うん」

ひたぎは、僕の肩を少し強めに噛んでから答えてくれた。

僕はひたぎの敏感な部分が露出するよう、左手で広げてから、広がったままになるようにしてから密着する。そこを意識して恥骨を優しく当てるように、めり込ませるようにして動いていた。

ストロークは取らないで、奥で動くようにして。敏感な部分に触れ続けるように。

「こよみ、それ、好き——ねっ、もつと……ねっ。ん、ん、……んっ、はう」

ひたぎはそこに当てるたびに痙攣する。

「こよみつ——ねえ、こよみ……ねっ、もつと……んうう……」

だから僕は懸命にひたぎを愛していた。

「ひたぎ。気持ちいいよ。愛してる——」

「んっ、私も、愛してる——ああっ、んうっ」

僕達の性器は、内部も外部もぬるぬるになつていた。

中からも外からも気持ちよくなつていた。

敏感な神経の集中したそこだけではなく、身体全体で愛しあつていた。身体全体で感じあつていた。

こんなとき、僕達は本当に一つになれた気がするのだ。

触れて欲しい部分、愛して欲しい部分が言わなく

てもわかる。目を見るだけで、いや、それすら見なくても心が一つになったように通じあうから。

ひたぎは何度か僕をきゅうつと締めつけるようにして、震える。僕はそんな蕩けたひたぎを愛おしく抱きしめる。

それを可能な限り、何度も何度も、繰り返し繰り返し続ける。

そんな風に、僕が懸命にひたぎを愛していると、ひたぎが僕を愛してくれていると、ふと、

「んくっ、はあう、あんっ、んっ——ねえ、こよみ。

ねえ……私、この天井も好きになるのかしら」

僕の下で喘ぎながら苦しそうに、蕩けた表情をして、ひたぎが言う。

「ん？ 天井？」

僕は高まりすぎていたものを抑えるためにも、動きを止めて訊ねた。

「はあっ、ふう、うん。天井。私ね、私の部屋の天井とこよみの実家の部屋の天井がね、なんだか好き

なのよ。こうしているときに、幸せな気分で見てるからかもしれないけれど」

僕に抱き付きながら、甘えた声で言う。

「そつか。僕はもう、こんなときは——ひたぎしか見えないんだ。ひたぎの匂いと温度と柔らかさしかわからないよ」

男の僕と、女のひたぎはやっぱり違うんだなと思つてしまう。女の子は、こんなときにも余裕があるのだろうか。

「んふふ」

熱くてトロトロのキスをする。

熱くてトロトロの部分の擦り付ける。ひたぎが細いくびれた腰をゆつくりと揺らす。僕がひたぎの体内で刺激される。ひたぎの体内が僕で刺激される。

「ねえ、ひたぎ——出ちゃいそうだよ」

「ん、うん。いいわ。んふ、お願い——一杯……頂

戴——」

僕達はしばらく無言になり、荒い息だけが続く。

二人は汗だくになる。

股間を擦り付けあう。

激しく。

それでいて、密着したままに。

気持ちよさと、苦しさが同居する時間。

僕とひたぎは、苦しさを分かちあっていた。

僕とひたぎは、快楽を分かちあっていた。

全てが上昇し続ける感覚。

僕もひたぎも、一瞬、息ができなくなる。

その瞬間。

「くっ——」

苦しさと気持ちよさの限界から解放され、僕の痙

攣が始まった。

気持ちいい感覚をひたぎの体内に流し込む。

流し込み続ける。

ひたぎはそれを受けて震える。

震え続ける。

快感で意味をなす言葉にならない。

愛おしさで離れることができない。

本当に一つになる刹那的な時間。

いや、それすらもわからないくらいの感情で溢れる喜びの時間。

しかし、それも次第に薄れてしまう。

ひたぎは僕の背に爪を食い込ませる。

それを惜しむよう、僕もひたぎも性器を深く結合させる。

口と口を深く重ね、更に体液を交換する。

精液も愛液も唾液も汗も。

身体も。

心も。

全てを。

深く重ねる。

少しでもその時間を延ばそうとして。

だが無情にも、その時間は、その濃度は薄れてしまふ。

声を出せないほどのピークを越えると、やっとお

互いの名前を呼びあう。

こんなにも一つになっているのに、その存在を確認するようにして。

必死に。

次第に甘えた声で。

息を整えながら。

お互いの身体をさすりあつて。

心臓が落ち着き、息が整うに連れて睡魔が襲ってくる。

心地いい、疲労感を伴なつて。

「——ふう、一杯……気持ちよくして——もらっちゃったわね」

「……僕も……今日、すごかった」

「……んふふ、いじめちゃったわね」

「……うん」

僕は本当に照れてしまふ。

「——でも……まあ、この勝負は……引き分けといったところかしら」

「……いや、勝負……って」

「こんなに……ドロドロになっちゃっているもの。
ドロドロだけにドロ〜ね」

「——ああつ、こんなときまで……得意顔、だあ……」

けれど、いつも程のそれではなかった。ひたぎも
とろんとした目をしていて、相当に眠そうだったか
ら。同じく僕の突っ込みも、勢いがなかった。僕は
もう、半分、目を瞑っていたかもしれない。

「んふふふっ」

ひたぎは柔らかな頬を、僕の頬に擦りつけながら
笑う。

「……うう、それにしても眠いよ——」

「もうこんな時間……だもの——ふふふ。昨日より
は随分と早い時間だけれど。私も、早起きだったし、
もう眠いわ——」

「——じゃ、引き分けてことで、僕——もうそろ
そろ限界——」

「ん、私も——ん、いつもみたいにする？」

「——うん——頼むよ——」

——そして僕は、ひたぎの柔らかで暖かな胸に抱
かれたまま、眠りに落ちるのだった。

甘えたまま。

優しく抱いてもらったまま。

頭を撫でてもらいながら。

気持ちいい夢の中へ。

夢のような柔らかさの中で。

愛しい女と一緒に——

005

目が覚めると、そこには綺麗なお人形さんのよう
な寝顔があった。お人形さんみたいというのは、果
たして女の子を褒める言葉になるのだろうか。なん

というか本当に作り物のように——完璧なのだ。いや、これは褒めているつもりなのだけれど、本人に言ったら怒られそうな気がする。

それにしても、やっぱり——未だに見蕩れてしま

う。
昔の、出会った頃のひたぎも、それこそクールビ
ューティーなんて言われて近寄りがたいくらいに綺
麗だったけど、今はそれに加え、とてもいい笑顔だ
ったり、すごく優しい表情を見せてくれる。安心し
た表情も見せてくれる。

今もそうだった。

本当に安心してきている、柔らかな、寝顔。

それだけで、僕は幸せになつてしまふ。

二人の温度が、心地良い布団の中で——

二人の湿度が、心地良い微睡の中で——

そういえば、こんな関係になつてから、こんなこ
とになつてから——僕が先に起きたのは初めてだつ
たかもしれない。いや、そんなことはないか。でも、

こんなにじつくりと、ひたぎの寝顔を観察するのは
初めてのことだった。

僕はこんなに綺麗な子と寝ていたのか——
すやすやと眠るひたぎ。

整った顔から、細い首筋。

白くなめらかな肌、美しい胸元。

僕はその感触を確かめたくなくなつてしまふが、折角
気持ちよさそうに寝ているのを起こしてしまつても
悪いし。

寝息と共に、柔らかく上下する胸。

布団の奥に、少しだけ見える裸体。

ちよつとだけ、乱れた髪。

とても綺麗だった。

本当に愛しかった。

乱れたシーツに眠るそんな無防備で美しい姿は、
僕だけのものだ。

掛け布団を、寒くないように少し深めに直す。
こんな、なんでもない時間が、とても嬉しい。

ひたぎが先に起きていたときも、こんな時間を感じてくれていたのだろうか。

半分寝惚けながらそんなことを思いつつ、幸せな気分浸っていると、ひたぎはぱちつと目を開ける。

僕は、ドキつとしてしまう。

「ん、おはよ」

はにかむような表情を見せてくれてから、ぎゅつと僕にしがみついて言った。とても甘えた声で。

「おはよう」

僕もひたぎを抱きしめながら、甘えながら言った。

「んーっ」

ひたぎは気持ちよさそうに、身体全体を猫のように伸ばしてから、僕にその柔らかな身体を巻き付けてくる。

でも。

「んー、今日も朝から、こよみくんは元気なのね。

ぐりぐりと遠慮なく押し付けてくるなんて」

途中から声が段々とクールになる。

「あ……ご、ごめん……」

その、なんというか、二人で抱き付いた結果、押し付ける形になってしまっていたのだ。

「で、でも……あ、朝はしょうがないんだよ」

ちよつと、しどろもどろになりながら。

うう、ひたぎだって、よく知ってる癖に。

ていうか、ひたぎが抱き付いてきたのに！

「まったく——そんなものを乙女の柔肌に、直接ぐりぐりと押し付けられたら……もう、痛いし、恥ずかしいのよね」

僕の顔を真っ直ぐ見つめるように、僕の頬を痛いくらいに両手で固定しながら、邪悪な笑みを浮かべて。ドSな表情で。

僕は、ちよつと不条理に怒られていた。

でも、この表情は——

「ご、ごめんなさい……」

視線を外すことも許されない僕は、素直に謝ると、ひたぎは右手を布団の中に潜り込ませて——

「もうっ、ちゃんと仕舞っておきなさいな……。んっ——」

そんなことを言いながら、ひたぎは僕に絡みついてきて——僕はあるべき場所、とても熱い場所に仕舞われてしまう。

「んふふ、このまま二度寝しちゃう？」

ひたぎは片目を瞑り——違和感を我慢するような顔をしながら深く深く息を吐いて。

「ふうう——」

いたずらっぽい目で、とても強気な目で、太ももを僕にすりすりとしながら——

熱い吐息を僕にかけて、柔らかな頬を僕にすりすりとしながら——

僕は、目眩いするくらいの、気持ちいい感覚に襲われてしまう。

そんな中でも、冷静な部分は残っていて——十分に濡れていることは、準備ができていることは、その先端の感触、スムーズに全体が動かせることであ

かっていた。

ひたぎはドSな表情で、挑発を続ける。

僕は何もしていないのに、ひたぎの中で、ゆつくりと——相対的に動いていた。

十分に馴染んでいた。

——だから。

「——ね、ね……ね、寝られるわけないだろう！」

僕は逆上するようにして、ひたぎを仰向けにした。繋がったまま、その上に乗るようにして。

「もう、こよみ——かわいいっ！ あっ」

僕はそのまま強く抱きしめながら、必死になつてしまう。

「はあっ、はあっ、はあっ、ひたぎっ！——ひたぎっ！ ひたぎっ、ひたぎっ、ひたぎっ！」

ひたぎも僕をぎゅうつと締めつけ、決して離さない。

「ん、あっ——ん、くっ、んっん、んっ……」

ほどよい布団の暖さは、ほどよかった僕達の温も

りは、一瞬で熱に変わってしまう。幸せな湿度は快樂の汗に変わる。

寝起きなのに、こんなにも激しく。

寝起きだから、こんなにも熱く。

掛け布団はめくれたままだった。一瞬寒さを感じたような気がしたけれど、すぐにそんなことを忘れるくらいに、僕は熱くなっていた。

敷布団が、シーツが、ぐちゃぐちゃに乱れる。

ひたぎの形のいい胸が、激しく揺れる。

僕はそれを、両手で更に変形させてしまう。

夢から覚めたはずなのに。夢のような感覚が僕達の中樞を犯す。

頭がくらくらする。

下半身から、何かが込み上げてくる。

「はあつ、はあつ、はあつ」

「あうう、な、中——奥、んうう、こよみ……そ、そんなにしたら、んっ、くっ——駄目、よ——」

「くうっ——ひたぎつ……」

「ああつ、ちょ、ちよつと……んく——寝起きなんだから、手加減——して頂戴……んあう——凄い、そんな——んつくう、んっ」

僕は止まることができなかつた。ひたぎはそれを懸命に受け止めていた。

「ひたぎつ……ひたぎつ！ ひたぎつ——ひたぎつひたぎつ」

「あうう、お腹が……んっ、くっ、あつ、お、奥っ——深い、わ——んう……」

僕とひたぎの交じわる音は、僕の肉とひたぎの肉が当たる音は、次第にペースを上げてしまう。

それらの音が、一定のペースを越えると、僕は声を出せなくなる。もはや、声にならなくなる。

苦しい。

とても苦しい。

次第に息もできなくなる。

けれど、この世界に僕とひたぎしか存在しない幸せな時間。

それを、二人は少しでも引き伸ばすように、少しでも一緒に居られるように、耐える――

.....

.....

ひたぎが僕の背に爪を食い込ませ、ぴいんと長い足を伸ばしてしまった瞬間だった。

僕とひたぎの意思で激しく重ねていた二人の性器は、一番深く結合した状態で、瞬時に停止してしまう。

――そして、別の動きに変化する。

放出するためと、それを受け取るための動きに。

それらは、もう、僕達の意思では制御できない。

僕達にできることは精々^{せいぜい}、更に深く交じわり、離れないようにすることくらいだ。

僕は高まったものを、放出してしまう。

僕は高めたものを、放出してしまう。

全てを、ひたぎの体内に。

ひたぎは全てを受け入れてくれる。

二人は震えながらお互いのそれを感じる。息を切らせながら、汗にまみれながら――

.....

.....

「くっ、はあつ、はあつ、ふう、ご、ごめん――ひたぎ」

「……はう、はあつ、ふう、もうっ、こよみ、乱暴なんだからっ」

そんなことを言いながらも、荒い息の中、苦しうだけれど、本当に息を切らせて辛そうだけれど、満足したような満ち足りた表情で答えてくれる。

高い体温。

激しい鼓動。

それらが少しずつ収まってくる。

僕の脳髓を掻き回す大きな快感も、収まってきていた。

でも、ひたぎは、なめらかな肌を滴^{したた}る汗がすぐに止まらないように、まだ余韻の中を漂っているよ

うだった。

だから、僕は少しだけ、体内とその外にある敏感な部分を、優しくゆつくりと刺激する。

そのたびに、ひたぎは悦んでくれて――

そのたびに、少し切なそうな顔をして――

そのたびに、お腹が震えて――

そのたびに、僕をきつく締めつけて――

.....

.....

だから僕は、もつともつとひたぎの熱さに直接包まれたままでいたかったけれど、その一方でちよつとだけ冷静になつてきていた。体温が下がらないうちにお風呂を沸かしておきたかったのだ。汗でぐちゃぐちゃに、それ以外の体液でぐちゅぐちゅになつてしまった僕達だったから。だから、本当に名残惜しいけれど、熱く包み愛してくれている部分から、僕を引き抜こうとする。

「ん、んあんつ」

その瞬間、それを拒むように最後まで僕についてくるピンク色の粘膜が、いやらしい音を立てると同時に、ひたぎは声を上げてしまう。

僕とひたぎの体液が、糸を引いて零れる。

先端が冷気を感じる。

それは濡れているから、余計に。

それは熱いところにあつたから、余計に。

僕はひたぎから離れて、立ち上がる。

「はあつ、はあつ、お風呂、沸かしてくるよ。ふうう、はあつ、ああ、なんかもう、酷いことになつちやつてるな」

昨日から何度も零していたそれは――こう、俯瞰ふかんして客観的にみてしまうと、シーツの上で酷い状態になつていた。

そこには、汚れてしまったシーツの上で、乱れてしまった布団の上で、荒い息に胸を上下させる美しい少女の裸体があつた。

それは、思わず背徳感を覚えてしまいそうな光景

で——僕は不意に、痛いくらいに硬くしてしまふ。

その少女はその様子を、黙って、ちよつと恥ずかしそうに見つめている。

だから僕は、その横たわる美しい少女を掛け布団で隠すようにして、風呂場に向かおうとした。

すると、

「ふうつ、はあ……ふふつ、もう、こよみつたら酷いんだから」

なんて、掛け布団に半分顔を隠しながら、ふざけながら言う。

「ひたぎだつて酷いよ。こんな朝から……あんなことされたら——」

僕はそんな可愛いひたぎをずっと見ていたかったけれど、ていうか、すぐにでも、もう一度愛しあいたかったけれど、その準備も既に十分以上にできていたけど、湯気が出るくらい熱かった身体も少しづつ冷えてきたので、寒い思いをする前に風呂を沸かしに行くことにした。

正直なところ、かなり悩んでからだつたけれど。

「んふふ」

そんな、いつもの幸せな笑みを背にして。

風呂場はキツチンの横だ。

僕は裸のまま風呂場へ向かい、火を入れる。戻る途中で炬燵部屋のエアコンのスイッチを入れてきた。

「うー、寒い寒い」

寝室に戻つてくると、ひたぎは掛け布団をめくり、暖めてあげるから、早くきなさいな」

なんて言ってくれる。

「うん」

布団に入ると、ぎゅーつと抱きしめて暖めてくれる。

すりすりとしてくれる。

僕の背中を手で。

太ももと太ももを。

頬と頬を。

それはとても暖かくて柔らかで——とても気持ち

のいい感覚だった。

「ああ、気持ちいい。でも冷たくない？」

「ふふ。大丈夫」

「ああ、あったかい。柔らかい」

どさくさにまぎれて、僕は二つの柔らかな部分に埋もれる。

「んふふ。こよみの、ね、お風呂に行くとき、ぶらぶらしていかわいかったわ」

ひたぎは僕のぶらぶらしていた部分を、優しく撫でながら。

「ひたぎのえっち」

「ずっとおっぱいばかり触ってる、こよみほどじやないけれど」

僕はひたぎのふにぷにした部分を、優しく揉みながら。

「ふふ、いやらしいこよみは、さつきも私のヌードを見て、欲情したでしょう」

「ん、あ、いや」

図星だった僕は、ちよつと恥ずかしくなって目線を逸^そらしてしまふ。その先には形のいい、僕の手に揉まれている胸があった。

「胸ばかりみて、いやらしい」

もう片方の手で僕の顎を上げ、目線を強引に元に戻し、ちよつと僕を睨^{にら}むようにして。

「どこかで聞いた台詞だな」

「んふふ」

ひたぎは僕の口に右手の指を入れて、左の頬を横に広げてくる。

「ん、右の頬も寂しいかしら？」

なんて言い、今度は左手の指を入れてくる。

「いはいよ、ひはひ」

痛いよ、ひたぎ。って言ったつもりだったのだが、まともに発音ができなかった。そんな僕の姿を見て

ひたぎは楽しそうに笑う。

「ふふ、このくらいで許してあげようかしら」

「なんだよ、もう」

僕とひたぎはずっと、こんな風に、お風呂が沸くまで戯^{たむ}れていたのだった。

006

後日談ではなく、長風呂から上がった後の、今回のオチ。

「ねえ、暦。そういえば、忍ちゃん見かけないけれど、お仕事忙しいのかしら？」

ひたぎはお気に入りのドライヤーで髪を乾かしながら、僕に訊ねる。

とても気持ちよさそうにして。

僕は炬燵に入りながら、そんな、ちょっと色つばいひたぎの姿を眺めていた。

ドライヤーと同時に使うとブレーカーが落ちるから、炬燵とエアコンの電源は切つてある。

「ん、それもあるけど、どうも、この部屋と相性が悪いみたいでさ」

「相性？」

「わかんないけどな。なんかホラーもののDVDに出てきた部屋に似てるんだって」

「なによ、それ」

ひたぎは怪訝^{けげん}そうな顔をして言う。

僕は火憐ちゃんと月火ちゃんが、忍とDVDを見たという話を説明した。

「——だからさ、どうも忍はこの部屋を怖がつてるんじゃないかって思うんだけど」

「え、だって、でも、忍ちゃんって……」

ひたぎは、納得がいけないような表情をする。

「そうなんだよ。あの忍がなあ。僕も、ありえないと思ったんだけどさ」

「おかしいわよ」

ひたぎは断言する。

納得がいけないような表情のまま、ちょっと難し

そうな表情のまま、ドライヤーを止めた。

ドライヤーをコンセントから抜き、畳に放り出したまま、炬燵の電源を入れて、わざわざ狭い僕の隣に無理矢理割り込んでくる。僕を強引に押しのけるようにして。

僕はひたぎのお尻に押されながら、炬燵の上にある、エアコンのリモコンをオンにした。

エアコンの音が部屋に響く。部屋が暖かいと、すぐに動くんだよな。

ひたぎは、しばらく思案するような仕草を見せて、「んん……うふふ。ひよつとして、私達のこと、気を遣ってくれているのかしら」

そんなことを言いながら、僕に寄りかかりながら、僕を押し倒しそうな勢いで甘えてくる。

「うーん、それも違うような気がするんだよなあ」僕はそんなひたぎを受け止めながら、答えた。

この女、滅茶苦茶スタイルが良くて細い身体をしているのだけれど、女子としては大柄な方だから、

結構、本気で押し倒されると受け止めきれないことがあつて――

「あらそう。でも、私は甘えちゃう」

お風呂上がりのお肌の良い匂いが、シャンプーのいい匂いが、僕の鼻腔をくすぐる。

ひたぎはさらに体重をかけ、僕は完全に押し倒されてしまう。

僕を押し倒すのが趣味のような女。

こいつ、本当に僕を押し倒すのが好きなのだ。体重が無かった頃の反動かもしれないわね。なんて言うていたけれど。

今の僕達はこんな関係だからまだいいのだが、こんな関係になるちよつと前からこんな調子だったから。

それはもう、当時の僕はもうどうしたらいいかわからなくて――

それこそ、こんな関係になった直後だって、どうしたらいいかわからないくらいで――

でもまあ勿論、素直に嬉しいんだけど。

本当に愛しいし可愛いし、それに、気持ちいいし。何よりひたぎが無邪気にそうしてくれるのが、それで嬉しく思ってくれるのが、僕は一番幸せなのだ。

「馬鹿。月火ちゃんと火憐ちゃんなんかはさ、この部屋に何か出るんじゃないか。みたいなこと言ってるしさ。ほら、家賃やたら安かったじゃん？」

僕はひたぎの乾かしたばかりのさらさらの髪を、指に巻きつけるようにいじくりながら言った。

「もう、折角甘えているのにそんな嫌な話しないで頂戴」

ちよつとむくれた表情で。

「ひたぎは、この手の話、苦手？」

部屋が暖まり、エアコンの温度センサーが、その動作を停止させる。

急に部屋が、静かになる。

「ん、別にそれほどではないけれど……。ムードがないって言うて……」

思わず僕はひたぎを強く抱いてしまう。こんな風に甘えてくるひたぎに、我慢できるはずがないのだ。こんなに艶かしいひたぎに、我慢ができるはずがないのだ。

「つていうか、ねえ、暦。ねえ、なんか妙な音がしない？　ねえ」

なのにひたぎは、甘えた蕩けきった表情から、急に真面目な顔になって、僕を驚かそうとする。

「またそんな、子供じゃないんだから、そんなので驚かないって」

僕は呆れながらも、そんなひたぎの子供みたいな振る舞いが可愛くて愛しくて——だからキスをしたくなつて唇を近付けた。

「ちよつと、嫌。冗談じゃなくて」

本気でキスを拒否されてしまう。

ひたぎに初めてキスを拒否されて（かなりショックだったのは内緒だ）、僕は一気に冷静になる。

確かに言われてみれば、妙な音が聴こえるような

気がする。

「隣の人かな——いや、でもこの部屋、そんなに壁薄くないぞ」

「そうよね。そんなはずないわよね——それにしても、なにかしら、この音」

「ん、ああ、紙みたいなの、箱を開けるような音？」

押し入れの方角からだ。

「まさか、押し入れの中に何か居るのかしら？」

ひたぎは、ちよつと怯えたような顔をして。

「いや、ま、まさか」

でも、確かに聴こえてくる。

ガサガサ。

カサカサ。

カサッ、カサカサッ。

と。

最悪のケースが頭に浮かんでしまう。

実際のところ、お化け——なんてことはないだろうけれど。

また、怪異だろうか。

いや、怪異でなくとも何か危険な小動物かもしれない。むしろ、それが現実的な回答だろう。

でも、僕は——吸血鬼で、吸血鬼もどきで、何度何度もこんな目にあつてきているから——

だから、小声で、

「なあ、ひたぎ、万が一のことがあるからさ、お前だけでも逃げられるようにしておいてくれ」

と、言うのと、ひたぎは、

「嫌よ」

と、即答する。

僕を本気で睨みながら。

——そうだった。こいつはそういう女だった。

「わかった。僕の前には出るなよ」

「ふん、文房具がないのが、ちよつとだけ心許無いけれど」

僕もしばらく忍に血を吸わせてないから、正直なところ、どうなるかわからないけど。

まあ、暴漢の類ではなさそうだし。

ひたぎさえ守ればな。

ああ、月火ちゃんの言うとおり、ボール買ったとき
 やよかったな。

……………。

ガラッ。

覚悟を決めて、異音のする押し入れを開ける。

「……なんじやい。のぶえもんは何の用じゃ」

……………。

「なんで忍が僕の部屋の押し入れでドーナツ食ってるんだよ！」

「び、びつくりしたわ」

ひたぎはへなへなと、その場に座り込んでしまう。

「いや、うぬらが仲良く風呂で乳繰りあつてる間
 のう、帰ってきたのじゃが」

「つうか、お前、この部屋大丈夫なのか？」

「べ、別に恐くないもん！」

「いや、忍、お前キヤラ変わってるぞ」

「ていうか冷静に考えたらー、儂がお化けなんぞ怖
 がる理由なんてないもんねー。だって、そもそもあ
 のツーテイルの小娘、浮遊霊じゃしー。あやつの方
 がよっぽどじゃわい。それにじゃ」

いやいや、キヤラ崩壊しすぎだって。誰だお前。

「それに？」

「押し入れ暮らしというのは、昔から憧れていたん
 じゃ。藤子不二雄先生のファンとしてはのう、ここ
 で生活せぬわけにはいかんじやろう。かかかつ」

「うるせえよ、にわかファンが」

……………。

まったく――

ひたぎは、堪えきれずにくすくすと笑ってしまう。

とても、いい笑顔で。

僕も忍も笑ってしまう。

「ふふつ。おかえりなさい、忍ちゃん」

「む、ただいまじゃの」

忍はちよつとだけ、ばつが悪そうにして。

「ふう、おかえり。忍」
「うむ」